民國十八年五月一日出版

女鐸

第八十六號

[illegible][illegible]國之社

女鑑第八十六號目次

天鈿女命



婦人の任務及其の任務を完うすべき方法を明にす(二)

(ろ) 教育上の事務

教育の要なるは、更めて、言ふを俟たず。家庭の規模は、學校と、一致すべくして、しかも、背馳すべからざるも、また、殊に、言ふを俟たず、たゞ、時文の弱を撓めて、實學を昌ならしめ、忠貞の大義をはげみ、文武の達德を昭にし、王道、いよ〳〵大に、皇威、ます〳〵重く、上は、以て、祖宗の功を崇うし、下は、用ゐて、子孫の慶をすゝめ、いはゆる、維新戊辰の業、赫々として、亘古にひかり、天下千秋、ながく望みて、中興の治をあふぎ、明治の美を稱せんことを、

即、今の大同、天暦、延喜、貞觀と呼ぶよりも、一層、雄まして、大なるま在らしむべきことの要なる、勿論なるを以てすれば、この間、婦人の事、萬の事ぞも、妥當平穩に、つとめて、奢侈の弊をおさへ、輕薄詭異の風をとゞめ、躬行、すべて、實意を先とし、一切の爲、すべからく、疎漏等閑の悔なからんを計らずはあるべからず。

蓋、昇平の日久しければ、奢侈の風をなす。奢侈の弊、文、おとろへて、世、微なるもの、つねに然り。西南亂後このかた、國家、やうやく、治安に慣れ、世くだちて、人あやふく、この間、文の弊、殆、いふに勝へざるものあり。今まして、因循、あらたむることを知らざるときは、その勢、將に、つひま、理を无みし、倫を斁るにいたらんとす。幸に、聖詔煥發して、その弊を、未萠ますくひ

て、しかして、頽瀾を、既例に挽かせたまへり。これ、稀有の盛事にして、これに次ぐに、去年來、清國と、事ありてより、時勢、ために、一變して、惰眠、また、やうやく覺めたり。即、軍需を献ずるもの、義金を捐つるもの、債を募るに應じ、夫を發するにしたがふもの、志を立て、奮起して、海外におもむくもの、拮据黽勉、戰地に往きて、實際を察るもの、看護夫、もしくは、看護婦となり、慰問、或は、金品となり、詩歌、文賦、議論、談辨、舞曲、聲律、伎劇となり、公私となく、上下となく、貴賤となく、老幼となく、みな、一體となり、すべて同意し、以て、いはゆる、義勇奉公、國を愛する悃を表するもの、日は、一日よりもおびたゞしく、したがひて、夫の奢侈と、文弱と、疾むべくして忌むべきもの、にはかに、その形をひそめ、これにかはりて、里談巷説、ことごとく、

軍を狀し、童謠兒話、また、一も、戰爭ならぬはなきに及びぬ。豪快活潑の氣、まことに、佳にして、可ならずや。たゞ、願はくは、この佳氣をして、あたかも、時の流行物の、昨は、是にして、今は、非となり、變轉かぎりなく、雲烟過眼、世を追ひて移るが如きを致すことなからしめん。これぞ、即、我が明敏淑慧なる婦人諸子の任として、ねんごろに、思をそゝぎ、心をこらすべき事點なる。それ、天下の事、何の事とはなく、即、何事といふことなく、すべて、女子の應援あるは、功を濟すこと速に、成を告ぐること全きは、もとより、贅辯を要せざるなり。されば、今日、我が國民、豪爽快濶の雄心勇氣、さらに、これを繋維存護し、これを培養助長して、しかも、持して、かろく發せず、あつく體し、ふかく鍛ひて、以て、萬一にそなふべきこと、はなはだ、須要のつとめにして、しか

も、その、これを繫維し、存護し、培養し、助長して、身に體し、骨に鍛ひ、貯蓄準備、以て、不時の需を待つといふことに至りては、世上、多少、有識の士、もとより、早に、成算ありて、良圖あらんこと、無論なれども、志かも、その圖は、これに預り、その算は、これを分ち、以て、適宜の勞に服し、應須の功を効さんは、婦人の任とせざるを得ず。ふたゝび、言へば、すべての事、ことに、教育そのものは、學校、家庭と、その、最、快濶正大、凛乎として震ひ、確乎として決し、毅然として端しく、肅然として整ふものを撰拔し、これを用ちて、氣節を皷し、以て、ます〳〵、世道を提起して、人心を作新するに足らしむべきことを圖るべし。婦人の、今日、事に從ひ、功を就す所以のもの、他なし。實に、此に存す。

（正誤　先回題目の下に（上）とせしは（一）の誤）

論說

女子文學

大町芳衛

家庭の主宰者たる女子にして、若し力を物質以上の事業に盡すの餘裕ありとせば、其の最能く適する所は文學なるべし。殊に和歌和文こそ、文學の中にても、取りわきて、女子に適すべき者なれ。男子は智力に富み、女子は感情に富む。智力に富むものは、科學を究むるに適し、感情に富むものは、文學を修むるに適す。科學は理論を主とし、文學は感情を主とすればなり。

これひとり余の獨斷にあらず。我が國の文學史能く其の然ることを證せり。まづ萬葉集を見るに、女子には柿本人丸の如き歌聖なしといへども、額田王以下女子の作頗る多く、古今集以後代々の選集にも女子の作少なからず、紀貫之朝臣、一

たび六歌仙を選べば、小野小町は女子にして、其の選に入れり。四條公任卿の選べる三十六歌には、伊勢、小野小町、齋宮女御、小大君、中務など、女子五人あり。刑部卿範兼卿の選べる後六々歌仙には、泉式部、相摸、赤染衛門、伊勢、馬内侍、道綱卿母、上東門院中將、紫式部、清少納言など女子九人あり。新三十六歌仙にも、式子内親王、俊成卿女、藻璧門院少將など、女子三人あり。また、定家卿の選べる百人一首の中にも女子は二十人あり。今日とても女子にして歌に妙なる人甚だ多く、税所敦子刀自の如きは、男子にも類なき歌人なり。かく和歌に於ては、女子、をさ〳〵男子に劣らず。而して所謂和文にいたりては、男子竟に女子に如かざるものあり。源氏物語の前に、源氏物語なく、源氏物語の後に源氏物語なし。枕草子の前に枕草子なく、枕草子の後に枕草子なし。枕草子と

源氏物語とは、所謂和文界に於ける空前絶後の二大文章なり。源氏物語は物語本を代表し、枕草子は漫筆文を代表して、共に和文の精粋たり。紫式部と清少納言との筆力は、古來千餘年の和文壇上（漢文、小説、戯曲など、和文以外の文體は別なり）絶えて之に比すべきものあらず。後世、眞淵、宣長、春海、千蔭、雅望、清臣など、擬古文を作るもの、多く輩出したれども、竟に此の二女の才筆を凌ぐこと能はず。こは故なきにあらず、和文といふものは、もと、優美を尚ぶ。而して女子のやさしき資性は、能く優美の文を作るに適すればなり。

所謂王朝文體のみが、我が國の文學なるにあらず。評論文もあるべく、近松の戯曲體もあるべく、元祿體もあるべく、馬琴の文體もあるべく、當世有名なる紅葉、露伴、篁村諸子の文もあるべし。然れども、和文と云ひ、雅文と云ひ、王

朝文と云ひ、擬古文と云ひて、清紫二女の流を汲める文章も、また我が國の文學壇上の一方に長く保存して貴重すべきものなり。古を好む男子は力を玆に盡くすべし。女子の文才あるものは、殊に玆に心を用ゐざるべからず。

女子は、万事、優美を尙ぶ。容裝も華麗ならむよりは寧ろ優美なるべし。言行も活潑ならむよりは寧ろ優美なるべし。而して紅閨の裡、翠帳の下、落花を惜しみ、秋雨をいたみて、胸中限りなきの詩思を寄せむとするにも、なるべく優美なる詩體を選ばむことを要す。和歌和文は、これ、卿等に最、能く適する詩體にあらずや。一寸した手紙にも、「恐惶謹言」など四角張りたる言葉を用ゐむよりは、「あなかしこや」とやさしく、女らしくありたきなり。

舊を捨てゝ新を趁ふのみが進步にあらず。新にして好き物を採ると共に、また、

舊にして好きものをも保存せざるべからず。是れ眞の進歩なり。文學も亦然り。而して雅文を保存するに最も能く適する者は、文才ある女子にあらずして誰ぞや。語を寄す、天下の才女、平安朝には清紫二女ありて、明治の聖代には紫式部なく、清少納言なしと云はしむること勿れ。

女子の風俗

三保松臣

束髪

禮は、天地の至道にして、儀は、人倫の大節なり。道は、須臾も離るべからず。離るべきは、道にあらず。節は、片時も止むべからず。止むべきは、節にあらず。道の、節と、並びて要なるは、もとより、辨を俟たざるなり。道の、節と、

並びて要なるは、もとより、辨を俟たずして、而して、輓近、世間の婦女子、おはくは、此の道と、節と、並びて要なる所以のものを、等閑にするにいたりて、予は、つひに、爲に、少しく論ひて、いさゝか、其の非を辨ふることの止むを得ざるものあり。何ぞや、他なし。束髪のこと、是なり。

輓近、風俗、ことに頽破し、あるが中にも、婦女の風儀、ことに、穩當を缺くものあり。束髪の如き、則、然り。

それ、萬國、おの〳〵、殊域、事情、おのづから同じからず。故に、西洋は、西洋の風俗あり。東洋は、東洋の風俗あり。支那は、支那の慣例ありて、而して、朝鮮、おのづから、朝鮮の習慣存す。我が大日本、何ぞ、獨、然らずといふを得んや。

抑、我が大日本國は、天壤無究の國祚を享け、神聖尊嚴の地位を占めて、萬世一系の　皇上を戴き奉り、巍然として、千古宇内に卓立し、一兵寸矢だにも、未、曾て、敵に加へられたることあらず。微塵纖芥だにも、また、嘗て、外に侮られたることあらず。蒼々たる山川の、數千萬年來、善く、太平の治を維持して、獨立の尊をたもつものは、豈、それ、國を擧げて、仁を喜みて、義に勇ましき故にあらずや。また、豈、風俗、優美にして、氣品、高尚なるが故にあらずや。寧ぞ、制度、簡淸にして、文物、温雅なるの効とせざるを得ん。何ぞ、治教、休明にして、化育、正大なるの驗とせざるを得ん。もし、いやしくも然らず。乃、卑野の事をおこなひ、瑣屑の爲をつとめなば、國、それ、かならず、衰弱し、しかも、泯滅して、迹なきにいたらんこと、識者を俟ちて知るべきにあらず。これ、

實に、我が大日本國、天成自然、固有特稟の國體として、坤輿の上、唯一無二の尊に居る所以のものなり。

然るに、今や、禮儀を輕んじ、品行を忽にし、察せず、恥ぢず、公然平氣、○○結と唱へ、○○卷と稱へ、牛遺樣の髻を着け、螺殼的に、髷を戴き、寛裳窄靴、婆娑として歩み、かつ、語りて行くが如きは、これ、おそらくは、國家のために、はなはだ、失體ならざらんや。蓋し、洋裝は、胡賈の服、君子の服にあらざるなり。戎服は、行伍の用、安居の禮にあらざるなり。西洋諸國は、往古、おほむね、奴隷の境たり。其の奴隷たりし日に方りては、おほく、爭奪を事とし、主として、利渉をおこなへり。其の風、專ら、怜悧にして、其の俗、輕便を旨とせしこと、もとより、止むべきにあらずして、傳へて、後世におよびても、尚、

貨を營み、商を經し、行伍、天下を遍遊し、貿易して、以て、生を爲す。知るべし。戎衣は、外洋の風、絨服は、正に、これ、賤丈夫の服たることを。我が大日本、古より、有道君子の國と稱せらる。有道君子、惡ぞ、買服して、奴裝するに忍びんや。男子といふとも、美德にあらず。然るを、况、婦人をや。語を寄す。世の賢妃、淑女、ねがはくは、ふかく、此に察し、日暮修省、以て、天人に副ふ所のものを圖らんことを。何ぞ、古の道にたがひて、今の俗を棄つるを得んや。

世の、束髮を利とするもの、曰はく、勞少くして、費尠し。簡にして、便なることは、從前の比にあらずと。惟ふに、これ、遁辭にして、實際の意にあらず。それ、梳髮の勞、眞に、幾許かある。香油の費、知らず、何程ぞ。寔に、少しく、

質素を重んじ、勤儉、以て、婦道を持し、婦德を修め、婦節を磨き、婦行を正さば、唱和稱ひ、舅姑熟し、閨門平に、夫婿和き、子女孝貞、彝倫肅、人は、嫻雅の美を稱へ、世は、窈窕の風を愛で、鄕黨、ために、仁に起ち、閭里、おたがひて、德に歸し、推して、天下の大におよび、天下、翕然として響應せんこと、かならずしも、難事にあらず。一人一家を以てするも、尚、爲して、就るに足る。況、天下衆庶人、均しく起ちて、與に爲さば、以て、民心を新にし、世道を盛にし、此の世をして、駸々として、眞文明の岸に達し、富强の域に入らしめんこと、何の疑をか要せん。これを、これ察せず、口を、瑣細の勞費に藉りて、天地の至道を蔑にし、人倫の大禮を無にするにいたりては、ことに、はなはだ、謂なし。これを要するに、花の朝、月の夕、客を迎へ、人に接し、家の祥、他の吉

凶は、もとよりなり。乃、平居、眠食談辯の際といへども、應須の姿容をとゝのへ、相當の威儀をそなへ、温順靜淑、優美に、清潔に、敬みて、婦節を持し、以て、禮讓を表するは、實に、缺くべからざる事にして、而も、此等の費用の如きは、みな、緊要の費用とす。無益の費用とすべからず。もし、これを、無益とせば、他は、何者か、贅ならざらん。

女子處世論　（十九）

三輪田眞佐子

第十八　人の心服を得よ

紅花咲き匂ひ、青芽萌え出づるたのしき春のあけぼのさへ、獨存は、心細きものにや、なほ、黄鳥、友を求めて、木の間を渡り、悲風蕭々のたそがれに、空行く

雁の、いと睦しく、互に、棄てじ、遲れじと、うちつれたる様を視るにつけても、凡て、天地の間にある生物は、樂しき日にまれ、かなし時にまれ、獨存すべきものならざることを知り得べし。況して、人は、社交的生存するにあらざるときは、一日だにも、安堵すること能はず。されば、人は、他に接する道を知ること、處世上、尤、肝要なりと言ふべけれ。あはれ、この道を知らざる人は、河風寒き夜半の友なし千鳥に異ならずかし。

斯る理あればこそ、古今東西の哲人の、この道を敎ふること、いと切なるなれ。孔孟の、禮義を敎へ、西洋學者の、交際法を說くは、全く、人に對して、その本分を盡すべき、處世上、缺くべからざるものなりと信じたるが故ならんかし。おのれ思ふに、人道は、自分を制抑すると、他人に應接するとの二に分ち

得べし。乃、一は、天道に基き、人性の本來なる道德を守らんため、獨を愼み、他は、社會に、身を處するに當り、人と、人と、相關係する心得なり。故に、この道を實踐せざるときは、能く身を全うし、志を遂すること難し。但、茲にいふ人に接する道とは、單に、世俗の所謂、交際といふものにあらず。なほ、父子、君臣、夫婦等、總べての人に對する心得なりと知るべし。

凡、女子は、人に接するに、孔子の曰へりし恕といふことを忘るべからず。乃、老者には、老者の心を察して事へ、幼者には、幼者の情を測りて導き、且、貴賤、各、その氣風に應じて交はり、決して、人をして厭はしむるなかれ。たとへば、女子は、清き空にかゝれる明月の、或は、海洋の波にうつり、或は、沼澤の漣にうつるなど、その所は、相異なるに拘らず、等しく、眞如の姿をうつす如く、人

の品に應じて、何人にも、滿足を得せしめよ。これ、亦、女德の一なり。大方、世評あしき女子は、かゝる世道を知らざるに由るか。

されど、おのれは、巧言令色を惡むものなり。もし、上述の理を諒了し、時としては、世人に諂諛し、時としては、家族を瞞着するを以て、處世の秘訣なりとするものあらば、その末は、驚くべき禍を蒙るに至らん。そは、天網は、疎なるやうに見ゆれど、漏らさゞればなり。徒に、人の口氣をうかゞひ、その意を迎ふるものは、反りて、擯斥せられん。古人の、鄕愿は、德の賊なりとまで、極論せしも、殊更、その意をまげて、人の心に適はしめんとするおそれあればこそ。

元來、女子は、無學の弊にや、一般、思慮を服藏しつゝ、しかも多言。嫉妬の心強きに、しかも、溫良を裝ふ等、父子、夫婦の間なりとも、容易に、胸臆をひ

らき難きことさへある僻習あれば、苟、かゝる僻習を脱除せざる人は、いつまでも、世に歡待せられざるべし。盞を傾けて、舊の如しとは、その至誠の情、人を感動せしに由るものならん。

れのれ思ふ。人は、赤心を、人の腹中におくほどにあらずば、眞に、人生の味を嘗め得ざるべしと、如何となれば、至誠の行なき人は、至誠の報を、他より得ることなければなり。昔、漢の元帝の官女に、馮昭儀となんいひけるものありき。曾て、宮園中に飼へりし熊の、放れて、御坐近く突きけるとき、昭儀、進みて、熊に近き、横りて、身を任せたるに、左右のもの、そのまぎれに、これを捕へたり。後、帝、あやしみて、故を問ひ給ひければ、妾聞く。猛獸は、人をたゞ得れば、敢て進まずと。若、この熊、御坐を侵さば、大事ならんと思ひ奉りつ

れば、おかせしなりと申しきとかや。實に、かゝる深き心の人は、君臣、父子、夫婦、兄弟の間は更なり。恒に、如何なる人よりも愛でられ、期せずして、幸福を享くるに至らん。そも〳〵、學問の要は、眞理を研ぎ、人道を蹈みて、天賦の幸福を享けんためにはあらざるか。あはれ。

史談

天鈿女命御傳

大町桂月

高千穂の櫛觸峯はなは攀づることを得べけれども、高天原は竟に到ることを得ず。茫茫たる幾千万年、物替り、星移りて、世は澆季となりぬ。神代の事、邈として、また知るに由なきものから、さすがに、めでたき神話の世につたはりて、歴史上に、一條の天梯を架せりければ、皇祖皇宗の偉猷を仰ぎまつるべく、皇室の尊にして、國體の淵源あることも、悟るべく、上代の人の遺風をも知り得べきは、げに、貴き

ことのかぎりなりけり。

天照太神の叡生におはしゝこと、木花咲耶姫の賢明におはしゝことなど、かけまくも、いと畏し。おしなべて、此の時代の女神は、をさ〱、男神に劣りたまはず。限りなき仁德を備へて、しかも、柔弱無氣力に陷りたまはず、また勇氣ありて、しかも、過激粗暴に傾きたまはず、あるは、父の命の仰をかしこみて、よく天下をしろしめし、あるは、夫の命を助けて、蒼生をはごくませたまひしなど、我が國の女德の基する所の、深く且つかたきを知るべし。

女子の本分は、家庭の主宰にあれども、出でゝ君に事ふるときは、躬を鞠し、誠を致して、其の分を盡さゞるべからず。後世の女子、やゝもすれば、軟弱無氣力に陷り、やゝ力あり、智あるものは、其の躬をたのみて、粗暴となり、過激となり、所謂おてんばとなるもの多けれども、共に女子の道を得たるものにあらず、また、上代の遺風を傳へたるものにもあらず、天鈿女命の如きは、蓋し女子の粉本となるに足るべきもの乎。そは、能く上代の女風を代表したるのみならず、また能く女子の道を得たるものなればなり。

古傳を讀むに、天照太神、素盞嗚尊の暴行をいとひて、天の岩戸に隱れさせたまひし時、高天原みな暗く、葦原の中つ國もこと〴〵く闇く、邪神横行し、妖災荐に臻りければ、八百萬の神たち、天の安河原に、神集につどひて、善後策を講じたまふ。こゝに、高御産巣日神の御子に、思金神と申すは、ことに智慮に富み、工夫に長じたまひけるが、天金山の鐵をとりて、まづ、天津麻羅といふ鍛冶にきたはしめ、つぎに、石凝姥命といふ女に仰せて、これより鏡を作らしめたまへり、また、玉祖命に仰せて、八尺の勾璁の五百津の御須麻流の珠とて、玉を作らしめたまへり。鏡と玉と已に製造し終りければ、天香山より、いと太なる榊を引き抜き來り、其の上の方の枝には、かの御須麻流の珠を懸け、其の中程の枝には、かの八尺鏡を懸け、其の下の方の枝には白幣、青幣を懸け、さて、此等をむ御幣として太玉命に取持たしめ、天兒屋命に祝詞を上らしめ、腕力無双なる天手力男神を、岩戸の側に立たしめたり。そは、天照太神の戸を開きたまはむ時、その力もて岩を排して出だし奉らむとてなり。

かく、天照太神を出し奉らむとする用意とゝのひ、諸神の役割りも出來たり。殘

れるは、天照太神の御心を慰め奉るべき方法なり。之の役をば、快活にして機智に富める天鈿女命に仰せたまへり。こゝに、天鈿女命、日影とて、天香山に生ひたる蔓草を襷とし、正木とて、うるはしき木の枝を折りて、頭に翳し、岩屋の前に空箱を倒にして、その上にのぼり、足柏子をとりて蹈み轟かせり。後世の能舞臺は、やがて、此の遺風を取りたるものなり。さて、足は、かく、空箱を面白く蹈み鳴らし、狐憑などの眞似して、衣裳をしどけなく亂し、雪よりも白き胸をあらはし、臍さへ露はして踊るさま、言はん方なく、可笑しければ、八百萬の神たち、覺えず、どッと笑ひどよめきて、高天原も振動するばかりなり。

天照太神、岩屋の中におはして、この笑聲を聞かしていたく、いぶかしみたまひ、岩屋の戸を細目に開きて、内よりのたまひけるは、天原自から闇く、葦原の中國も、みな闇きに、などて、かく鈿女は遊びし、また、八百萬神もろ／＼、笑ふぞと問はせたまひければ、鈿女命申さく、汝が命より優りて、貴き神來りたまひしゆゑ、かく喜咲ぎ悦ぶなりと答へまつる。その時、かねて工みたることなれば、天兒屋命、かの榊の中枝にかけたる鏡をさし出せば、天照太神の御姿、あきらかに寫れり。天照

太神の御顔、もとより輝くばかりうるはしくおはせば、鏡に寫れる御顔も同じく輝くばかりうるはしかりけり。鏡といふものは、この時はじめて作られたるものなれば、太神は、己の御顔の寫れるものとは知らせたまふに由なく、他に立派なる人來れりとのみおぼして、好奇心を起したまふのあまり、やゝ戸より出でゝ臨みます時に兼ねて待ち設けたる手力男神、得意の力を振ひて、大神を引き出したてまつれり。此の時に天鈿女命が演じたる踏舞は俳優とて、後世の歌舞伎の濫觴にして、やゝ滑稽的なれど、其の頓智より工夫して、八百萬神を笑はせて、終に太神を岩戸より出しまゐらせたるの功は、大なりと云はざるべからず。

天照大神一たび岩戸を出でさせたまひてより、六合、もとの如く明かになり、群妖頓に跡をひそめたり。その出たまひし時、光明たちまち迸りいでゝ、八百萬神の御面、一時に白く見えければ、これよりして、面白しといふ詞は起れりといへり。かく、天鈿女命は、岩戸の變に大功を奏して、なほ、怠らず、いそしみ事へけるほど、天孫降臨の事あるにいたりぬ。

天照太神、瓊々杵尊に、豐原の瑞穂の國は、吾子孫の世々王たるべき地なりと、詞

よさしたまひ、鏡、玉、劍など、所謂三種の神器を授けて、これを視ること、なほ、われを視る如くし、殿を同じうして齋きまつれど、のりたまひて、この日本國にくだらさせたまへり。此の時、天鈿女命は、瓊々杵尊に從ひまつりぬ。かくて、旅立ちの御用意とゝのひて、出立たんとせさせたまふ時、先驅のものども、還り來りて申さく、天の八衢に、一人の怪しき神おはす。その鼻高くとがりて長さ七寸もあるべく、背の長さは、七尺、口も尻も照りかゝやき、眼光烱々として、さながら八咫鏡の如しと申しければ、從神を遣はして、其の名を問はしたまへども、みな、その威に恐れて、要領を得ず。こゝに、天祖、鈿女命におはせて、汝は手弱女なれど、容貌威ありて、人を服せしむるに足り、且つ交際にたけたれば、とく行きて、我御子の天降まさむとする路に、誰なれぞ、かく立つぞと問へとのたまふ。鈿女單身往いて、此の怪神に面し、まづ衣をくつろげて胸乳を露はし、裳帶を抑へたらして屹然と立ち、啞然として大笑せり。是れ蓋し、わざと奇怪の樣して、敵の膽を拔くなり。彼の怪神も、是迄來りし人とは異なりて、喰へぬ女と思ひけむ。遂に一歩を讓り、言葉をやわらげて、如何なれぞ、かゝる樣するぞと問ふ。鈿女命、すかさず、天孫

の降らむとしたまふ路に、汝は、如何なれど、かゝる樣するぞと鸚鵡がへしに問ひ返せば、我は猿田彦神と申す。天孫降臨と聞き、先導しまゐらむとて、こゝに立てるなりといふ。如何なる處にか導くと問へば、日向の高千穗の槵觸峯に導かむといふ。げに、怪神とて、恐れし神も、よく〳〵聞けば、王事につくさむとする忠臣なりけり。而して、その忠臣なることを知るにいたりたるも、ひとへに鈿女命の功なり。あはれ、鈿女命の如きは、君命を辱しめざる外交家といふべし。王政維新の際、西郷隆盛、大兵を率ゐて東下しける時、山岡鐵舟、幕命を帶びて、往いて訴ふる所あるに、隆盛その背を叩いて、笑つて曰く、是迄幕府の命を帶びて來りしもの多かりしかど、徒らに泣いて哀訴するのみにて、事情更に通せず。子に逢ひて、始めて事情を詳にすることを得たり。好男子、努めよやと言ひけるとかや。鐵舟の如きは、能く天鈿女命の遺風を學べるものといふべし。

猿田彦神は、大國主神の一人の御子におはす。容貌あやしくて、天狗の面に似たれど、御心はまめやかにして、勤王の志厚ければ、かく、出迎へて、天孫を導きまゐらせむとせるなり。後世、王舞に用ゆる赤面長鼻の像は、やがて、此の神の面に象

りたるなり。又諸社の祭禮に、此の象をつくりて前導するものあるも、此嘉例を傳ふるなりけり。

瓊々杵尊、猿田彦神の言のまゝに、遂に、日向の高千穗の槵觸峯に降りたまふ。ここに、鈿女命を猿田彦神に下したまひ、鈿女命に仰せて、猿田彦神の還らむ處まで送らせたまひければ、鈿女命は、君の仰かしこみて、猿田彦神と共に、伊勢國に下りぬ。かくて、猿田彦神は阿邪訶といふ處に住ひたまひけるが、一日、海におぼれて、果敢なくならせたまへり。その御子の中に伊賀津姫と申す姫、伊賀國を領したまひければ、その國を伊賀とは呼ひけるなり。猿田彦神の子孫、伊勢國にとゞまりけるが、倭姫、天照大神の齋宮を定めたまはむとて、下りたまふ時に、その後裔なる大田命、出でむかへて、さこくしろ、宇治の五十鈴の川上は、これ、大日本國の中にて、ことに勝れたる靈地に侍るとて、導きまゐらせしも、また、その祖、猿田彦神の遺業にならひたるなりけり。

猿田彦神みまかりたまひたる後、天鈿女命は、幼き御兒だちをつれて、伊勢國をたちさり、日向國にのぼり來て、また、もとの如く事へぬ。敕命により、その男神の

御名を負ひて、猿女君と呼ばれたり。これまでは、魚類を食としたふとこなかりしが、鈿女命は、自らか發明して、魚類を奉れり。島の速贄といふは、やがて是なり。後世、この島の速贄、たてまつれる時に、猿女君に分ち給ふためしありしも、その祖、天鈿女命の功勞を賞したまへるなりけり。天鈿女命のかゝることまで、發明しけるは、その才智の非凡にして、君よつくさむとする心の厚かりしを知るべきなり。天鈿女命の子孫は、猿女君といふ名を帶び、其の家の女子、出でゝ朝廷に事へけり。其の職は、先祖の遺業をつぎて、神樂の事にあづかりしなり。又鎭魂祭の儀式をも司りしなり。さるに、大同の頃よなりては、猿女君の族滅少して、他姓のもの、僞て猿女と稱して事ふるものあるにいたりしが、弘仁の頃にいたりて、猿女君の眞の血統をつげる稗田福貞子を召し出して、つかへしめたまへり。今日にいたるまで神社に巫女と稱する者ありて、神鈴を振りて、神樂を奏するも、また、此の猿女君の先祖に胚胎せるなり。まことに、鈿女命の如きは、女子の出でゝ君につかふる者の摸範にして、また、我が國上代の女風を代表するに足るべき女傑なりけり。

虎御前　　花園紫子

虎御前は、伏見太納言實元卿の女なり、實元卿故ありて、吾妻路に流されし時、大磯の長者の娘と契り、女子を生ませ、虎と名つく。虎女みめかたちうつくしく、心さま優にして、和歌をよくし、無双の遊君なり。十七歳の春の頃より、曾我十郎祐成と相語らひ、わりなき中となりにける。祐成元より貧にして、其体見苦しかりければ、虎女常にかなしみ居けるが、一日祐成例の如く、大磯に來り長者が家の軒端に、佇み居ける折しも、鎌倉殿の召に應じて、近國の大名等、綺羅錦繍の装ひ、四邊まばゆく、打連立ちて通りしを、虎は人々と倶に看て居り、彼れは何處の誰々ならんと問ふ、先陣は横山東馬正、次は誰次は某次は何といふ。虎つく〴〵聞き、誠に古き語に、耳は樂を聞時は愼み、心は奢時に放にすべからずとかやいへり、思ふべきならなくに、此の人々の、馬、鞍、鎧、太刀、刀こそ欲しけれといふ。餘の遊君等打こけあわぬ願かな、何の用にか立つと腹をかゝゆ。虎涙を浮め、祐成殿に進らせたくとのみ、跡はえもいはず、面を背けぬ。遊君等怪しみ、何事やらんと囁きけり。祐成つく〴〵と感じ、かほど情あるものを、立聞しけりと思はれては、いとはづか

しと、然らぬ體にて、内に入り睦くぞ語りける。其の後、建久四年鎌倉殿、富士野御狩の時、曾我兄弟親の敵、工藤左衛門祐經を討取り、其の身狩場の露と消ぬと聞きて、虎は悲みに堪へず、緑の髮惜氣もなく薙捨て、尼となり曾我の古郷に行て兄弟の母に對面し、それより箱根に赴き、別當に逢ひて、佛事をいとなみ歸るさに、兄弟が討れし處に至り、

浮世ぞとおもひそめにし墨衣いままた露の何とおくらむ

と打詠じ、又大磯へ立歸り、かうらい寺の山の奥に、柴の庵を結び、行ひすまして、往生を遂げしとなむ。

漫録

詞のあるべ（四）

玉のや主人

一 ○撰と、○選と、○選とは、「えらぶ」といふ意なり。○撰とは、「つくる」といふ意なり。されど、勅選集、唐詩選などの選は、必、選とかくべきなり。やがて「えらぶの意なればなり。さるに、古來、往々、

誤りて、敕選集どあるべきを、敕撰集と書きなど志たるあり。撰には、毫も、「えらぶ」といふ意は無きことゝなり。撰とは、文を作るどいふ意に用ふ。碑文の後に、某撰すとあるは、やがて「つくるの意と知るべし。ゆめ、「ゑらぶ」といふ意に、撰の字を用ふること勿れ。識者のもの笑ひとなるべければ。

一　襤褸、襤褸は、古語にては、「つゞり」といへり。これを、「つゞれ」などいふは、後世の人わざにて、古の人は、必、「つゞり」といひたるなり。古今集十九の卷に、在原の棟梁の歌に、

秋風にはころびぬらしふぢバかま
つゞりさせてふきりぎりす鳴く

とあるを見るべし。又、古今集の九の卷に、素性法師が歌とて、

手向にはつゞりの袖もきるべきに
もみぢにあける神やかへさむ

とあるをも見るべし。皆、つゝりといへり。「つゞれ」とはいはざりけり。古書をよまん人、心したまへ。

一　「さまよふ」、「さまよふ」といふ語は、古と、今と、其の用ゐざまを異にせり。後世は、「ぶらぶら歩く」といふ意に用うれど、古は然らず。「うめく」といふ意に用ゐたり。これも、むかし學びする人の、注意すべき事なめり。

一　「はびこる」、「はびこる」といふ語は、蔓延といふ意なれど、邪惡の蔓延するに用ゐて、決して、善き方には用ゐず。即、「子孫はびこる」などはい

はざるなり。例へば、落窪物語にも、

いかで、子うませむと思ふ。少將の君のにはいでこで、このしれ者の、はびこる事よとのたまふを、

などあり。文を作るもの、心して用ゐざるべからず。

一　今の人は、「石に腰かく」などいへど、こは、古文には言はぬ事なり。古文には、「腰かく」といはずして、必、「尻かく」といへり。例へば、源氏物語箒木の卷に、

門ちかきさらうの、すのこだつものに、しりかけて、とばかり、月を見る、

といふ事あり。擬古文など書かむ人は、注意せざるべからず。

一　荻と、蘆と、古は、同一のものをいへり。後世、蘆の中にて、其のさまの好きものを賞玩して、之を、庭などに植ゑしより、荻といふ名稱起れり。されど、荻と、蘆とは、同種類のものなれど、よく〳〵見れば、やゝ異なる所あり。猶、菫草と、「つぼすみれ」と、少し異なるが如し。されど、名は、全く異なるも、同種類のものなるより、浪華の蘆は、伊勢の濱荻などいふ諺も起りたるなり。

一　「天井」。其の語は、同じなれど、古今にて、其のものを異にせり。今の世に、家の天井といふ物は、昔の承塵といひたるものなり。昔に、家の天井といひたるは、今の世の天井竿といふものにて、即、其の竿の、井の形に組みたるより、來れる名なり。延喜式の七の卷なる踐祚大嘗會悠紀院

の條に、以二檜竿一爲二天井一、席爲二承塵一とあり。
一「しきゐ」。この名も、古と、今とにて、其の物を異にせり。今、「しきゐ」といふものは、古の「しきみ」といひたるものにて、古に、「しきゐ」といひたるは、今の坐席の事なりき。日本書紀の顯宗天皇の御卷に、「離レ席」といふ文あり。又、天智天皇の御卷にも「磐城村主殷之新婦牀席頭端一宿之間稻生云々」といふ事あり。これら、古今の變遷を知らざれど、古文を讀みて、をかしき誤解を起す事あり。注意したまへ。
一「ひさし」。古の家づくりにて、ひさし(庇)といへるは、母屋の次の周圍の間を、しかいひ、其の庇の間の次ぎなるを、孫ひさしなどいひたり。源氏物語の桐壺の卷に、「おはします殿の、東のひさし、ひがしむきにいしたてゝ」などあり。さるを、今、「ひさし」といへど、唯、家の軒下に、別につくりそへたる軒を、いふ事のみとなれり。さて、古に、母屋といひしは、身屋ともかきて、今の世にいふ家の本間、或は、奥座敷ともいふ所なり。其の母屋の外が、皆、庇にて、母屋は、庇より、一段高かりしなり。其の母屋と、庇との隔の上下にあるものが、なげし(長押)といふものにて、上なるは、「うはなげし」といひたり。下なるは、幅廣くて、其の上に、跪く事などの出來たるほどなりけり。母屋は、庇よりは高き故に、長押も、自、高かりしものにて、大鏡の六の卷に、「御病いたうせめて云々、御簾のもとにゐざり出させ給ひしにも「長押を下りわづらはせたまひて、」といふ

事あり。「下りわづらふ」とあるにて、高かりしことと知るべし。又、西の宮記の十四の卷に、跪二長押下一、兩三度膝行、昇二長押一といふ事あり。高かりし事、明なり。これも、古の物語などよむには、知らでは叶はぬ事なりかし。

一「むしろ」。今、「むしろ」といへど、唯、藁を編みたるものをのみいふやうなれど、古は、決して然らず。古に、「むしろ」といへる中には、竹をあめるもあり、菅をあめるもあり、また、絹なるもありけり。萬葉集の十一の卷に、

ひとりぬとこもくちめやも綾むしろ
をになかまでに君をしまたん

とある「綾むしろ」は、やがて、「きぬのむしろ」なり。また、新古今集の中に、後京極攝政　大政大臣の歌なる、

きり〴〵す鳴くや霜夜のさむしろに
ころも片しきひとりかもねむ

とある「さむしろ」は、蓋、「小蒲團」といへる類にて、これも「きぬのむしろ」なりしならむ。

一　故と、亡と、死にたる人を記すに、故と、書き、又、亡と書く二種あるは、元來、區別あることなり。故とは、即、故大政大臣といふやうに、死にたる人の官名を記す時に、冠らすべき語にて、亡といふは、亡太郎兵衛といふやうに、死にたる人の名を呼ぶ時に冠らす語なり。亡大政大臣といひては惡しきなり。又、故太郎兵衛といふもあしきなり。さらに、今の人は、亡も、故も、同樣の語のやう心得て、故法螺福太郎、或は、故種蒔權

兵衛など、故何某を書く事せり。立派なる人が、立派なる文に、立派に、故何某などゝかきて、無識の恥をさらして、知らざるわり。をこにも、たわけにも、をかしき限りならずや。姫たち、心して、去る無識の人を學びたまふな。

一　て、と、つゝといふてにをはの別。いづれも、接續詞ともいふべきさまに用うなるてにをはにて、即、語と、語とをつなぎ、又、文節と、文節とをつなぐに用うるてにをはの中にて、両者ともに、働詞と、働詞とをつなぐ語なり。例へば、「鳥が飛びてゆく」、「鳥が鳴きつゝゆく」といふ如し。「飛ぶ」といふ働詞と「ゆく」といふ働詞とをつなぎ、また、「鳴く」といふ働詞と、「ゆく」といふ働詞とをつなぎたり。これもかりいへも、おなじやうなれど、よく／＼思へば、明なる區別わるなり。

ての方は、其の上下なる働詞が、共に、同時の働きを示せる時にも、これをつなぐを得。例へば、「鳥飛びてゆく」といふ如く、「飛ぶ」も「行く」も、同時の働なり。また、上なる働詞が、下なる働詞より、以前の働きを示すやうの時にも、これをつなぐを得。例へば、「鳥が林をすぎて鳴く」といふ如く、鳥が「過ぐる」時は、「鳴く」時より以前なり。「つゝ」の方は、上下の働詞が、共に、同時間の働きを示せる時にのみ、これをつなぐを得る語なり、且、上の働詞と、下の働詞とが、種類の異なる時よのみ、用ゐらるゝ語なり。例へば「飛びつつなく」といふ如し。「飛ぶ」も「なく」も、働きは、同時にて、且「飛ぶ」も「なく」も、異種類の働詞

なり。かくいひたるはよし、されど「飛びつゝゆく」などいひては、誤りあり。「飛ぶ」と「ゆく」とは、働きは、同時なれど、「飛ぶ」も、「ゆく」も、同じやうなる働詞なる故、惡しきなり。かゝる時には、飛びてゆくといふがよきなり。近時、西洋の文を飜譯する人、又、西洋の文に溺れたる人などは、とかく、此の誤謬に陥りて「車がまわりつゝある」「人が見つゝある」などいふは、わづかなる事のやうなれど、我が生國の文脈も、語脈も知らぬかと思へど、他國の夷のやうおぼえて醜く、又、我が國の文脈、語脈を忘れてかと思へば、心のうすきやうおもはれて、頼もしからず。姫たちは、注意したまへ。

一　他人より、物を贈られたるをよろこびてやる手紙に、今の人は、「ゐやを申す」と、書くあり。痛きひがごとなり。「ゐやを申す」とは、御禮を申上候といふ意ならむが、禮（ゐや）とは、わいさつ、或は、行儀をいふ意の語にて、物を贈られたるに、「禮を申す」とは、奇怪の事ならずや。かゝる時には、「よろこびを申す」といふべきなり。なほざりの手紙などにて、人の品格心がまへなどの、自、見らるるものなれど、心して笑はれなしたまひそ、姫たち。

隱岐の院遠嶋百首（上）

天の命が。時の非か。あやにかしこきみ身もて、逆臣がために、空しく、潮路遙けき隱岐の孤島にさすらはせ給ひしみ心のうち、いかにお

はしけむ。後の世のわれらが、おしはかりまつるだに、涙の種ぞかし。あはれ、水無瀬のおほん殿に、天が下の歌人らを集へて、花、紅葉をめで、霞をあはれみ、露をかなしみしを、むかしの夢にて、孤島の浪うつ磯陰に、岩を、片たよりて、柱たて、柴の庵のたゞしばし住むたに、物うきはみなるを、いつを限としらずして、海士がほす網に、袖ぬらし、藻鹽やく煙なびく方を見ては、わが故里と思ひわび、浪の音たかきに、眼をさましては、昔しのびて、荒き汐風、こゝろして吹けとかなしび給ひし新島守ぞ、あはれなりける。

次に掲ぐるは、後鳥羽院が、遠島のうちのつれづれに、よびいで給ひし、世にいふ遠島百首なり。あへて、珍らしとにはあらねど、わざわざ、こゝに掲ぐるは、聊、心ありてのことなり。讀む諸孃も、また、その心してよ。

春二十首

霞みゆく高峰をいづるあさ日かげ
　さすがにはるのいろをしる哉
墨染のそでのこほりにはるたちて
　ありしにもあらぬ詠をぞする
とけにけりもみぢをとぢし山川の
　たま水くゞるはるのくれなゐ
もゝ千鳥さへずる空はかはらねど
　わが身の春ぞあらたまりぬる
里人のすそ野のゆきをふみわけて
　たゞわが爲とわかなつみてむ

ふるゆきに野守が庵もわきはてゝ
わがなつまむと誰にとはまし

根芹つむのざはの水のうすごほり
まだうちとけぬ春かせぞふく

沖津浪たつやかすみのたえまにも
あまの小舟のはるけくぞみゆ

限あれど垣根のくさも春にあひぬ
つれなきものはこけふかき袖

遠山路いくへもかすめさらずとて
をちかた人のとふもなけれど

はるかぜに山田の畔を行くしづの
みのふきみだる暮ぞさびしき

うらやまし永き日影の春にあひて
伊勢をの蜑もそでやほすらん

もえいづるみねの早蕨ゆききえて
をりすぎにけるはるぞしらる

わけのぼるそで春雨にうちしほれ
みねのさくらも色ぞものうき

ながむれど月やはありし月ならむ
うき身ぞもとの春にかはれる

春雨もはなもときぞとそでにふる
さくらつゝきのやまのした道

やどからむかた野ゝはらのかり衣
ひもゆふぐれのはなの下かげ

山姫のかすみのそでやしほるらむ
花こきたれてはるさめぞふる

墨染のそでもあやなくにほふかな
はなふきみだるはるのゆふ風

物おもふに過る月日も知らねども
　　春や暮れぬるみねのやまぶき

夏十五首

けふとてやおほ宮人のかへぬらむ
　　むかしがたりの夏ごろもかな

菖蒲ふくかやが軒端にかせすぎて
　　しどろにおつるむらさめの露

たをやめのそでうちはらふ村雨に
　　とるや早苗のこゑいそぐらむ

ふる里をしのぶの軒にかせすぎて
　　こけのたもとに匂ふたちばな

今はとてそむきはてにし世の中を
　　なにとわたらぬ山ほとゝぎす

くれかゝる山田の早苗わめすぎて
　　とりあへず鳴くほとゝぎす哉

五月雨に池のみぎはもまさるらむ
　　蓮のうき葉をこゆるしらなみ

難波江やあまのたく繩たきわびて
　　けぶりもしめる五月雨のころ

さみだれに宮木も今やくだすらむ
　　眞木たつ嶺にかゝるむらくも

あはれにもほのかにたゝく水鷄哉
　　おいの寢ざめのあかつきの空

ゆふだちの晴れゆく嶺の雲まより
　　いり日すゞしき露のたまざゝ

見るからにかた〳〵すゞしなつ衣
　　ひもゆふつゆのやまと撫子

ゆふすゞみ芦の葉みだれよる浪に

ほたるかずそふ江のいざり火
またもゆるむかひの森の蚊遣火に
おもひもさそひゆくほたる哉
くれ竹の葉ずゑかたしきふる雨に
あつさひまわる水無月のころ

うすこほり（一）
霧の舍主人寄贈

こは、香川景樹うしの、そのをしへ子どもに、歌合せしめて、そを判ぜられたるなりけり。姫等のために、參考となるべきふし〴〵もすくなからねば、やがて、こゝに揭げつ。

氷室のおもみならねど、氣ふしも、物の底より、見いでたる渦こほりの一とぢ、とる手めづらかなりや。つらなる人能半は、世にきえて、たゞ〳〵殘るかずにしも、老が名のまじれらむ、なか〳〵に、はかなくも、いとおぼつきなし。これ書たるするがの守ますげのぶのうしめ、今は、世におはさぬよ。いにし文化の十とせあまり、所禮の春、わかきその友どち、白川の花のもとにて、歌むすびせられたるが、いと、うら山しくて、女どちもして試みむとて、よみつくしるに。人かずさへ、たらざめれど、さながら、めしう、いと、さう〳〵しけれど、隔てぬかぎりを、ひとりふたり、やとひ添へて、師の君のやどりいませる鴨河のほとりに、うちつどひて、折からなる千鳥に、雪に、名所の松をくはへて、その三の題をしも、三十字まり三はかひに、ならべうたべるなりけり。いましおもへど、

そこなるわざなり。さきなるその友のは、はやく、梓につれて、世に散はふめり。そのみならぬおのが浦回の藻屑どもは、さても朽なむ。それえりわけて、ひろひ給へりし詞の玉は、ともにうもれなむ、はた、あたらしう、口をしけれど、殘りたる友がきにはかりて、世にひろめむとおもふなり。また、此しげのぶの書すてられし水茎を、そのまゝ、えうせて、この都の人どもに、ながきかたみのしのぶ草、かつは、手向ぐさともかりつめなむは、後の世さまに、しはじみたる蜑がすさびのしれわざなりけらし。

天保のみとせみな月のはじめの日

禪尼嘯月しるす

一番　千鳥

左勝　常清

夕しほや沖のしらすにみちぬらん
千鳥なきたつこゑぞきこゆる

右

さよふけて北山おろしおろすらし
くもの河原に千どり鳴きたつ

おなじ鳴たつぞりの聲、いづれか、あはれならざらん。北山おろしおろすらしは、大島おろしおろすなりといふに似たるも、中々、あしとには侍らねど、何となく、しらべあぐるに、いとすゞしげなるこゝ地して、冬めかぬかたも侍らん。されば、

夕しほの満ぬるまではなけれども沖になく音やはるかなるらん

二番

左勝　久敬

鴨河のおほはししろくおくしもに
千鳥のこゑぞさえわたりける

右　實煕

うら千鳥かたみに友やしたふらん
をちこちになく聲ぞきこゆる

かたみに、したふらむをちこちの聲、すがた、やすらかに、ことなく侍るべし。さはいへ、ことさら珍らしとも侍らじや。左は、此やどの右に見なれたる

鴨川のおほはしなれどわたらしくつくりかへ
たるけさの霜かな

三番

左　成久

汐かせにふきたてられて友ちどり
明石のせとを鳴きわたりけり

右勝　久道

川波のよる／＼かなしいねがてに
ともなし千鳥わびてなくこゑ

明石にてきゝしむかしの友ちどり今さへこゑの身にぞしみけるとは、承侍るものゝ、たゞ今、たゞ打つけに、聞ながし侍るよる／＼のわびこゑは、また、一きは、いとゞしくや侍らむ。

四番

左持　文秋

こゝのへの御溝にかよふ聲するは
鴨のたゞすのちどりなりけり

右　正高

あじろこすなみ音高くさよふけて
　田上がはにちどりなくなり

津守國助の、よをさむみかたしきわぶるころもての田上川になぐり鳴なりといへるに、末句はかよひ侍るものゝ、あじろこすなど、實に、波おと高きしちへにて、糺河の清き瀬のとにも、をさ〳〵おとるべうも見えぬばかりにや侍らん。

九重の御垣の衛士がたく火にもあじろのかゝり影はおくれず、

五番

　左持　周慶

しほかせの吹上の濱に來てみれバ
　ころさへさえて千鳥なくなり

右　貴林

さえわたる鴨のかはせの月かげに
　友よびかはしちどりなきたつ

さえわたる川瀬の月、これ、また、見なれたる影にして、外ならずや。さるに、いまだ、見しらざる、

紀の海のやへの汐かぜいかなれど月よりうへに吹上のはま

六番

　左持　秀胤

かれわたる千くさの濱のはま風に
　うらさびしくもなくちどり哉

右　惠岳

松の名は世にたかさごの浦ちどり
　　ちよとも空に啼きわたるかな
うらさびて、あはれなる空になく音のさやかな
る、いづれとか申侍らん。
枯わたる千ぐさの色のなかりせば松のみさを
もいかで見ゆべき」千世の聲のみは、めづらし
から侍れど、調につきて、きこゆるすべくや。

七番

左勝　　　　天朗

水鳥のかものかはらにさよふけて
　　きこゆるこゑは千鳥なりけり

右　　　　慶章

うちつけに寒くもあるか河かぜに
　　ひとり千鳥のなきわたるこゑ

打かへす友ちどりの、千聲、百聲、さのみは、い
かゞ聞きわき侍るべき。さるは、さめぬねざめ
の枕かみに聞くにこゝちし侍れば、いづれとか申
てん。なほ、左かも、
みぎはかも聞ゆる聲はさらねども打つけより
はあはれなりけり

八番

左　　　　芳

鴨河のあらしもつきもさえ入りて
　　まくらぞちかく千鳥なくなり

右　　　　齡

かも河のほとりに住めるむら千鳥
　　鳴かぬよもなし聞ぬよもなし
おなじ河づらのすみか。これ、また、おのが身

に志られて右に、左に、聞きなれ侍りぬ。村ちどりとあるや、只、きくかたには、あまり、たしかに侍らん

鴨河の千どりの聲はかはらねど月になく音ぞあはれなりける

活花のはじまり

田邊氣和子

世に、さま〴〵の流儀といひて、めではやす活花の源を、何處ならんと尋れど、京都市烏丸六角通りなる、六角堂の觀音を侍持する寺なりけり。池坊とぞいふ。いにしへより、活花の家元にして、日本全國に、此の流の挿花を指南する人、多くあるも、すべて、許の書を出すは、此の六角の寺なりけり。元祖は、小野妹子にして、人皇三十四代の頃、聖徳太子、小野妹子に、草木の花を、水に活けて、保つ法を授け給ひしより、活花の道、始めて起りしなりけり。

其の上、妹子、專ら、佛を信じ、觀世音の小像を、守袋にいれ、これを、首にかけて、山背の國を旅行やしたまひけん。ある山中にて、志ばしいこはむと、淸き池のほとりにて、首にかけたる觀音を、木の枝にかけ置き、水のもとにより、手水をつかひなどして、木かげる丶岩にか丶りて、おもはずも眠を催し給ひしに、いかなる夢をか見給ひけん。やがて、さめければ、立上り、觀世音の小像を取らんとし給ひしに、木の枝より離れ給はざりしにより、妹子は、思ひ合すてぞやありけん。此處に、

御堂をまつらひ、此の觀世音を安置して、守住せしを始めとして、時移り、世變りて、妹子の子孫四十二代にぞなりにける。今の住持は、池坊專正とぞいふ。人皇五十代、桓武天皇、都を、山背の國長岡より、今の平安城に遷し給ひしその頃は、今の六角通りあたりは、いまだ、山路にやありけん。其の後、追々、都のちまたを、つくり開かせ給ふに、此の觀音の御堂、途の中程にあたりければ、少し、後の方へ引いり、更に、六角堂をつくり、寺院も、こんりふしたりしとぞ。さるを、維新の際、此の寺、燒失して、わづかに、六角堂のかたちをかりに、假に、寺院をつくり添へて、住持せしも、本年、京都に於いて、桓武天皇の御祭禮、且は、博覽會に際して、去年より、寺院新築にかゝり、つくりみがき得しは、妹子の御靈の、いかに、心たらひならむかし。されば、活花を學ぶ人々、我が日本國の挿花の元祖は、池坊流なりと知り給ひ。其の花、其の木の出生のかたちを變せず、天然の法をもて、優美に高尚に、挿給はんこそねがはしけれ。

難波江(つゞき)

一　愛憎の變と申ことあり候、我園の花は、野山の花よりまさるやうに思ひ候が、愛憎の變と申候、是も、人と、吾と、隔てあふ故にて候、誠に、惑の甚しきことにて候、そのかみ、彌子瑕は、衛の君に愛せらる、或とき、彌子瑕が母、疾ありとて、人ゆきて、夜告げしかば、彌子瑕、いつはり

て、君の車に乗て行しを、衛君、かへつて、孝なりとて稱擧す、又、一日、彌子瑕、果を食ひしに、甘しとて、くひかけし果を、君に奉りしかど、衛君、また、忠なるよしを以て稱しぬ、彌子瑕、寵を失ふとき、まづ、此二ッを以て、罪せられしとぞ、愛憎の變、よく〳〵愼み思ひはかるべく候、

一　それ、衣は、寒さを防ぎ、食は、饑をたすくるにさへわたらで、又、外に求むべからざるよし、古より申傳候、去かるを、今様の女は、奢侈を專にし、髮のかざり、衣までにも、金玉をつらねて、質素なる事をきらひ候、漢の文帝御寵幸を得し愼夫人、衣地をひかず、帷帳文繡なしと申候を、古より、美談にいたし候、ものゝふの家に生れし女は、猶更、質素にして、萬、古への風を去たふべきことゝ思はれ候、去かれども、女の物まりがほに、ならはしに背くは、また、見にくき物に候、

一　それ、人を使ふには、先、老たる者を憐み、幼き人をなつけ、萬、慈悲の心を專にして、人の心を、我心どおしはかりて、事をとり行へど、道にさかふこと有まじく候、心さかしく、口才ある者をば、近くとり立てつかふまじく候、かならず、人をそしりて、上下の間をも隔て、我心に驕る物にて候、且、又、心に叶ひたるものをぞ、宜敷思ひ察すべき事にて候、かくの如き人に、奸佞は、多く可レ有候、

一　老萊子、親につかへて孝なり、とし七十なれども、老い衰へたるを、父母に去らせじとて、幼

けなき時の戯をなし、誤りて、地に仆るれど、則、小兒のなきをなす、たゞ、親の心のよろこばんことをはかりしぞ、いと孝なる事に申傳候、

一　伯俞あやまちあれバ、其母うちたゝきて、折檻しけり、ある日、母、伯俞をうつに、常ならずなきければ、母あやしみて問ひけれど、對て曰く、罪を得てうたるゝ時、常に痛み候に、今、母の力おとろへていたむに至らず、此故に泣といひけりとぞ、父母怒れバ、怨まず、怒らず、深く、其罪を受て、いよ〳〵、孝を思ふ、誠に、孝に純なる人といふべし、

一　薛包といへる者、學を好みて、よく行ひをあつくしけり、父、後の妻をめとりしに、甚、薛包をにくみて、外へいださんとせしかバ、薛包、日夜泣かなしみて、父の所をさることを不レ能、うちたたかるゝに至りて、やう〳〵、家外へかりやして、旦夕、水そゝぎ、はらひきよめなどして、まめやかにつとめしを、父怒て、またおひ出せしかバ、やむ事を不レ得して、里はなれに住居して、猶、日日、來りて、つとめ仕ふること、すでに、一とせあまりなり、つひに、父母恥て、かへしをらせけりとぞ、至孝、人を感せしむる、宜にこそ、

一　曹爽がいとこの文叔のつま、名を、令女といふ、夫早く死す、年若くして、子なきを以て、又、再び嫁せんとす、よりて、令女、髪をきり、兩耳をきりて、再び嫁すべからざるを志めす、其の後、曹氏、こと〳〵く誅せらるゝによりて、令女が叔父、曹氏とゐんをたち、强て、令女をむか

へてかへりをらしむ、其の後、また、嫁すべきよしを、人の言けれど、鼻をきりて、信をしめしぬ、或人、令女にいひしは、それ、人の、此世にあるや、艸の葉末の露ちりの如し、何ぞ、かくまで、心をくるしめんや、かつ、夫の家はろび盡ぬ、今、誰が爲とて、節を守り給ふぞといひしかど、令女、對て曰く、吾きく、仁者は、はかりおとろふるにつきて、節義を改めず、義者は、存し亡するによつて、心をかへずといひけりとぞ、いまの世までも、美談にいたし申すことにて候、

一古しへ婦人、子を姙みては、立居も正しくし、食物もたゞしからねばくらはず、すべて、露ほども、邪なる事にふれず候へど、其の生るゝ子、かたち端正にして、才も、人にまさることなり、さて、夫より、めのとを擇みて、善に導き、惡に入らざる樣にそだて申候事にて候、

一始めもしるしゝ如く、女は、學問とても、男どもは、大にたがひ候、たゞ、四書、小學など、よろしく、わきまへ候はゞ、姫かゞみ、假名烈女傳の如きふみ、よく〳〵心をこめてみるべく候、かつ、古き記錄なども、みやうにより、行ひたよりあり候故、しかるべく候、只、源語、勢語の類ひは、甚、淫亂なる事ををしへ申候やうなることにて、行ひにはなしがたく候、しかし、しひて、ふせぎみざるは、俗に背くにて候間、心さへ定り候はゞ、かの文などみるも、風流なる事に候はむ、

一行ひは、温和に、慈悲ふかく、節義に則んでは、聊も動かず、人にあひては、恭敬にし、事を

はかるには、是非にまよはず、此四ツのもの、信實より出し候はゞ、此上にくはふべき道はあらじとおもはれ候、

うち思ふまゝをかきとめ候ゆゑ、文字のあやまり、事の前後、故事のたがひ等あるべく候、孝子、烈女、これにかぎるべからず候へども、筆にまかせておぼえしまゝかきしるし候、

みなもとの定信

（右にてをはり）

水難翁（上）

橘舍主人　横井知萬多

（一）　水難の祖父君

千波萬濤よせては返へす萬石の浦を控へ、舟出すれば直に波又波を隔てゝ、一望萬里亞米利加の洲に及ばし、進めば金華山をめぐりて黒岬の險所あり。退けば出水のため昨日の淵は今日の瀬とかはりて日々洲を異にする北上川の河口石巻の港あり、横に走れば、たゞ僅かに十五丁ばかりの地峽を隔てゝ深さ幾尋ともしられぬ女川灣あり。見わたす限り波濤ならぬはなき渡波町は、漁に出る百舟千舟、商に入る小舟大船、右に左に西に東に、棹楫はさぬ盛昌は近き處にならびなし。この町に船持の資産家にて濱邊千濤といへば、近郷近在二十里かけてしらぬものなき名望家にて、このあたりの人はたゞ祖父君〳〵といひて尊敬しけり。世に蕩樂といへば、酒樽を枕とし美人にのまるゝ外なしと思へるやうなれど、千濤のはさるたぐひ

とはいたく異なりて、いとおもしろくよそめにもめでたくおぼゆることとなりき。そは金子を扶に入れてその里をありきまはり、貧しき人々に恵みやるを上なき樂とはしたるなりけり。かばかりの蕩樂ある人なりけれど、況して慈善の事業には率先して金を擲ち物をおくり、赤十字に育兒院に慈惠病院に水難救濟に、いづれも相當の力を盡したりしが、中にも波の中に生れ、波の中に其大かたの世を過しつる身とて、最も熱心に自らも贊成し、人をも誘導したるは水難救濟のことなりき。こはたゞ波の中に生れ、波の中に大かたの世を過しつる故のみならず、大に所謂あることとなりき。そは水難救濟會のために、わが持船わが船子らの、九死の中より一生を救はれたりしによりてなり。それより後は、船こそ兎まれ角まれ、人命はいとも貴し、世にこれに上こす慈善やあるべき。あはれ、水難〳〵と口ぐせのやうにいひけり。いつのことにかありけむ、この里の人悉く漁場に打集ひて、何くれと語らふ折しも、其の口によりて其の里人誰彼は知り、其の人等は異人々に傳へ、異人々は又異人々に傳へ、遂には其の近郷近在の人々まで、其の氏をもいはず名をもよばず、字をつけてたゞ水難の祖父君〳〵といふに至り、其の名は朝な夕な絶えせずよせくる波のごと、ひゞきわたらぬ隈もなかりき。

（二）　不服のいさかひ

渡波町の漁場にて、今日此頃の大幸に、こゝの漁夫魚かひとる他所の商人など數多打つどひ、大漁

の祝なりとて、其のしるしに魚のかた龍宮のさまなど染めぬきたる、衣料の布などおくりおくられ、酒くみかはして、貴族も紳士も更にしらぬ大愉快をきはめ、船歌など濁聲にうたひ出し、大かたは舌もまはらぬ斗になり「無禮講じや〳〵と叫び出し頃、今日の上客として中央の席にゐたりし翁は、いはでもしるき千濤なり。翁は莞爾にうれしげなる面色にて、いと物靜かに「皆さまに少しお咄したいことがある」と説き出けれど、麻のごとく亂れあひたる席は、頓に靜まりかへりて翁のために耳かたぶけぬ。「皆さまの中にはとくより御承知の方もあらうが、我が邦のやうに一寸そこへゆくにも船の便をたのまねばならぬ海國にては、まづ何よりも海についていろ〳〵のことを考へるのが必要である。私が今お咄するのは、其の内の海上保護のことである。露國では救濟法が盛んに行はれて、全國沿岸至る所として救難所の設置あらざる處なく、今では九百七十ヶ所の救難所があります。英國にも六百六十七ヶ所の設があります。それゆゑいかに風波の烈しい時でも、航海者は安心して往來が出來る、固より安心して往來してもよろしい、難破といふことは一切させぬといふ神さまが出來たやうな物じやから。つまり其の安心といふことが、商業上にても軍事上にても、海上王となつた原因ではあるまいかとおもふ。然るに我が國にも金刀比羅宮の宮司であつた琴陵宥常といふ人は、この事業に熱心であつて、明治廿二年中に設置の端緒を開きました。就ては

われ〳〵船持連中は、率先して此の事業に賛成し、益擴張せねばならぬことゝ信じます。それはつまり人事ではないからである」と読み返したる時、櫓をとりては東海きつて腕きゝ、魚問屋にてはひろく海外まで其名を鳴らし、夢野悟太郎を知らぬかといはぬ許に、席の一隅より、雲つく男ともいひつべき大兵のあらくれ者一人、酔ひに酔ひて仁王とやらむ顔のごときが突立あがり、雷のごとき聲して「老人の繰言きゝたくもない、わつちやあその事業とやら水難救濟とやらいふことには賛成が出來ぬ。殊に金刀比羅宮といふのがまづ癪に障る、山かんの狐神主につまゝれて何のざまぞ。それは何じや、物知りがほにこの目出たい席上で、難破〳〵とおもしろくもねへ、救難所々〳〵といふがそんなもろこしへるのは、どうか難船が出來ますやうにと待つやうなもの、いやさ祈るやうなもの、そんな不吉な咄は眞平だ、難破するのは船頭がわるいからさ、たんと月給出して雇入れぬおめへたちの船にはわるか知れぬが、わつちらの船は南蠻鐵さ」と酒氣にやいと喧しくなりたるに、今まで春花の艶へるが如くのどやかなりし席上に、俄かにさつと野分立ちけむとおもはるゝばかり、いと物すざまじく皆人は互にうちまもれるのみ。

(三)　きかれぬときごと

一方は魚をあきなふ大花主の悟太郎なり。一方は此あたりに其名ひゞきわたれる千壽なり。魚を商なふ爲めには、この花主をはなすべからず。花主

大切なれども、恩義のつき千濤もすつべからず。皆堅唾をのみて、いかにならむずらむと、手に汗にぎり見てありしが、千濤はさすがにはしたなくいひ爭ひもせず「まことにかゝる面白き席にて、いひ出しつるは宜からざりき」と其の場はそれにて事すみしが、千濤はつくづく思ふやう、かゝる男を說きてこそ益もあれ。何事もたゞ唯々とうけ答へするよりは、遙かにまされりと、其の翌朝まだ船出せぬを幸ひに、とく船に出行き、夜前のことなどいひ起し、さて二たびときおこして水難のことに及びぬ。「さて夜前お咄しかけておいた水難救助のことについては、大分御意見もあつたやうじやが、私の意見もきいてもらひ、其上に御說も承りませう」といひはじめたるに、昨夜以來の不服ははや胸にみちて、沸くが如くなれど、けふはさすがに酒ものまぬに、さかわりなく劍付くる理にもゆかず、さぶ／＼ながらきゝゐたり。千濤は「水難救助の必要なのは、今更いふまでもないが、政府が其の費目をたてられ、且つ褒賞條例を定められてあるのを見ても明らかである。然らば水難救助を擧げて政府の仕事とすれどどうかといふに、この事業を專ら政府の事業とするのは甚よくない。もと救助水夫は命がけの仕事であるから、到底金錢づくでは滿足に働くものでない。故に各國とも慈善の會といふのは皆私設である、それはわが生命を擲つてかゝる仕事ゆゑ、大の慈善心がなくてはならぬ故じやと考へます。ことにわが國にも、琴陵氏が創立してから、今では十ケ所の救難所があ

るし、昨年迄に船舶百八十二艘、人員七百六十七名を救ふたといふことじやが、何と大した數ではありませぬか。これが全國へゆきわたつたら如何であらう。私はことに所謂あつて、この會の主旨に特に賛成したといふのは、昨年中海產物を積んで、上海へやるため、神戸へ荷を廻はした處、紀州の沖でふと暗礁にのりあげて、今や殆んどといふ處へ、大島救難處のために救はれて、乘組は固より、船も積荷も悉皆無事でした。のせた物こそ又得られもすれ、貴重なる人命にもしものことがあつては、とても再びとりかへしがつかぬ、わゝ危なかつた、とおもふてから、一層感情を高めました。又人によると、金刀比羅宮は神道ゆゑ、宗敎をひろめる手段じやなぞゝいふけれど、この會は全く別物で、たゞ澤山の金を出して、起したといふ斗のことで、佛敎者でも耶蘇敎者でも、さらにそんな區別はない。恐らく情といふことをしつてゐるものは、みな這入らねばならぬ、山かんでどうして事のある譯のものでない。ことに有栖川宮樣が總裁で、其の他の貴顯方が役員となられてをる。どうしてこの方々が、山かんや宗敎の利用のためにするものを御賛成なりませう、こんなわけですから、どうか賛成を乞ふて、廣く有志者を得るやうに御周旋を願ひます」と息もつがず熱心に述べけるが、悟太郎は何をか考へけむ、たゞよそ言をのみいふに、千濤も術盡きてせんすべをしらざれば、再會を期しそこ／＼に辭して歸りぬ。船を出づるやがて、悟太郎は聲するどく、しかも聞

えよかしに水夫に命じていはく、「はやく鹽をまけ」。

花ふゞき

盬井雨江

その十六

忠義の一鐵に、身をかためたる賤機は、水火の中にも屈せぬ決心、女子ながらにすさまじく、虎をも拉がむばかりの武士の、ひきつゝみて打ちかゝるを、ものともせず。亡き父の影とも魂魄ともおもひて、守りはなさず、身にさしかためたる菊一文字の短刀の、力の限り心の限り、縱橫無盡にうちふりて、八方八面隙もなき尖先は、鋭からざるに非らざるも、敵も、さすがに有井が肱股の勇士、侮り難き太刀筋は、一髮の隙とてもあらざれど、賤機は、目ざすは奥ならむ三郎をこそと思へども、なかなかに、此方の圍みを斷り破るを得ず。一進一退こゝを先途の難戰苦鬪、危き事いふばかりもあらざる折りから、思ひがけなき七郎が加勢、あな後ろを討すなと、敵は前後に、はつとわかるれば、賤機は、僅に圍みをのがれ、やは七郎殿が、暫時こ

そ頼みまゐらすなれ。やうなき奴に妨げられて、今まで、あたら時をも移したる無念さ。いでや三郎、何處にかある。君父の仇、天にかけ地にくゞるとも、討たではやまじと、のゝしりつゝ、奥を志して、踊りすゝみぬ。

敵も、おくれず追ひすがりて狼藉なり、不禮なり、いつかなやらじと、たちふたがれば、七郎は、また、小しやくなり、無用なり、嫉き奴原、邪ますなと、うちかかりて、さへぎり戰ひ、追ひつ返へしつ、かへしつよせつ、忠烈と勇士とが、一歩も遣らじ寄せじと、切り結びたる花々しき奮闘、いづれ散りても惜しからむ。

三郎が妻は、遙かに太刀音の烈しきに、おどろかされ、何事ならむ、盗人や入りたるかと、側へなる女子を呼び起し、さすがに武士にかしづく身の、まさかの用意わすれざる枕にちかき床にかけたる薙刀をおつとりて、忍びやかに、音する方へ近づきて、物越しに様子を窺ひたるが、何とおもひけむ。あな者ども、太刀ひけや。世の常の夜盗にも似ず。徒らに猛りたる狂人ともおぼえず。仔細ありげなる人々の振舞。尋ねで疑ふ事やある。人々も又暫時待たれよ。狼藉の仔細きかまほしと、呼びかけながらに、立ち出でぬ。

思ひがけねど、賤機も七郎も、おぼえず此方を見かへるに、武士どもは、又、主君の一言、畏りて太刀をひけば、夫人は、なほも暫らくと制しつゝ、賤機七郎に近寄りて、やよ暫時、若き方々、こは三郎が妻なる者ぞ、名乗り出づるを、きゝも終らず、賤機は、あな三郎の妻とや、君父の仇の三郎が妻とや。何處にかある。三郎を出したまへと、短刀を握り固めて、詰め寄れど、夫人も、薙刀を、片手につきたてたるまゝ、少も動かぬ武門の氣質。やよ少女子。おん身、頻りに君父の仇との給へど、三郎ばかりは、さる不忠不義の汚名を被るべき振舞ありしとおぼえずといはせもはてず、賤機は、顏色烈火のごとくなりて、弓矢たばさみ、天皇に射むかふ北條に味方するだに、武士の身にあるまじき不忠なるに、萬乘のおん末を預り奉りて、密に御壽を奪ひ奉りたる不忠、いかに天地に入れざる大逆ならずや。それのみならず、御息所のおん迎へにと、たばかりのぼせて、尼ヶ崎に曲者野武士をかゝらひ、父武文を討ちはたし、剩へ、御息所を奪ひ去らむとしたる、不義とも不忠とも、譬へやうなき人非人の三郎。この賤機が君父の仇と呼べるに、何の不當のあるべきか。おん身、三郎殿の内方とあれば、さるを、いかでか、知りたまはぬ事のあるべき。や

うなき事を、陳じな給ひそ。とく〳〵、三郎どのを出し給へ。隱さむは、汚き業に候はずや、卑怯の限りに候はずやと、いよ〳〵猛りて、つめよりたる賤機が氣色、いさましくものすごし。

なにを思ひてか、三郎が妻は、手にせる薙刀、やをら下に置き、賤機を見て、莞爾とはゝゑみ、御身の責めたまふ逆名罪狀、三郎が身には、更に知るよし侍らず。皆、おん身の疑心といふものにすぎ侍らず。さはいへ、御身のしか疑ひたまふも、おもへむ、道理は無理ならず覺え侍る。三郎は、忠義をおもふが故に隱くし。おん身は、主君を慕ひ給ふが故に、はやり給ふものから、はしなくも、疑ひを作りたるに過ぎ侍らず。かむかり告げまゐらすのみにては、えとくしたまふよしなからむ。言は多く候に、まづ疑ひを解き刃を收めて、此方へ給へ。ゆゑよしを告げまゐらせて、後に、なほ、御身がの給ふ不忠不義の罪の誠ならむ、ふたゝびおん身が、君父の仇と、名乘りたまふを待つべきかは。自ら進み出でても、御成敗にかゝり侍らむ。さあるも怨み奉る所、更に侍らぬものをと、兎も角にも、しばしは疑ひを靜めたまひて、とく此方へ給へと、振舞の流石に道理あれば、賤機も、なほ、あながちに疑はむは、な





かなかに心せまき業ならむ、かゝかりにいふなれバ、一度はきゝて、是非を定むるこそよけれど、思ひ定めて、また露ばかり疑ひをおくけしきもなく、短刀を鞘におさめて、七郎にも太刀を收めさすれバ、三郎が妻は、早速の承引をよろこびきこえ、いちさきに側女を走らせやり、親らは、いざ給へと先きにたちて、やゝ離れたる客間とおぼしき方に導けば、既に燈火はともされ、席など清げにしつらへたり。

文林

松間藤　　近衛　忠熙

陰たかき老木のまつの木の間より
わかむらさきに匂ふふぢかな

待郭公　　東久世通禧

おいが身は心せかれてほとゝぎす
おそき夏ともおもひけるかな

鍋島　直大

我が宿のそともの森にほとゝぎす
こゑせぬ程はさびしかりけり

孝の心を　　福羽　美靜

よきが上にいやよかれとのおや心
それにそむかぬ人ぞよろしき

待郭公　高崎正風

いつよりも今年は遲しほとゝぎす
待たでゝつる夏もおわりしを

摘茶　諏訪忠元

面白くうたひつれつゝ時きぬと
宇治とがの尾に木のめつむ也

待郭公　宮地嚴夫

いたづらに月ふけにけりほとゝぎす
去年の初音はこよひなりしを

坂正臣

耳はやきみやこ人にはほとゝぎす
ことに待せてなかんとすらん

大口鯛二

なが爲にうゑぬ垣根の卯のはなも
咲けむまたるゝほとゝぎす哉

鎮西八郎のかた　大畑弘國

あづさ弓いづる矢先のいちはやく
雄きこゝろも名も知られけり

禁庭橋　三輪義方

九重のみはしに馴れてたちばなは
常世ものともおぼえざりけり

眞間手兒奈　佐々豊水

まゝの井のきよき流は千代八千代
さとの手兒奈のかゞみなり鳧

竹亭夏來　田中重職

わがやどの軒のわか竹つゆちりて
あした涼しくなつは來にけり

菖蒲　勝家貞良

神代よりかはらぬものは軒ごとに
かをるさ月のあやめなりけり
日野西廣子

待郭公

大そらは雨ぐもながらくれにけり
こよひすぐさじ山ほとゝぎす
三條　章子

年ごとにきゝにし物をほとゝぎす
ことしはつ音をなど惜むらん
三島　竹子

吾のみと思ひしものをほとゝぎす
初音きゝつといふひともなし
小笠原艶子

雨につけ月につけつゝほとゝぎす
またぬ日はなくなりにける哉
保科　寧子

山とほきいちの住居はほとゝぎす
夜ふけてのみもまたれぬる哉
高崎　竹子

卯花のさきそめしよりほとゝぎす
いとゞ初音のまたれけるかな
原田蒼生子

うの花の月の夜ごろになりにけり
山ほとゝぎすひとこゑもがな
服部　磯子

まつ人のこゝろをくみてふる雨の
はれまになのれ山ほとゝぎす
安東　菊子

勇士

石の城はがねのふねもなにならん

手もすまに勤む見れバ　かなしき處女子
むかふ敵なきやまとますら雄

楠正行朝臣　阿部鋌子

君がためおもひ定めてかりそめの
なさけは花にうつさゞりけり

更衣　尾崎すう子

人ごゝろうらなき衣にぬきかへて
ひとへに夏とおもひけるかな

雨中早苗といふことをよめる歌

海上壽子

とのごもり降來る雨に　簑笠もきぬゝにぬれて
わしびきの山田の面の　早苗とる賤のをとめ子
二親をやすくあらすと　黒髪はけづりもあへず
天皇のみつぎつかふと　たな肱に水泡かきたり

昔々文庫序

落合爲誠

世の中に、幼き人の心ばかり、かはり易きものはあらじ。やう〳〵、背の丈のびゆくまゝに、善きゞ、悪しきも、見聞くにつけて、おのがじゝのすきわざも出來て、終には、さかしくも、愚にもなるぞかし。かゝれば、古の人、早くも、そを憂ひて、善きを勸め、悪しきを懲らさんの志にて、たはれたる中に、戒となるふしをもまじへて、種々の物語をなん作りおきける。こゝに我が友大江小波ぬしは、才もて、世に聞えたるが、わけて、幼き人の心を、深くも汲取りて、かいえるされたる水莖の跡、いと多かり。さるに、此度、また、古の

人の志を繼ぎて、彼の種々の物語を、をかしくも、おもしろくも、綴りなはし、やがて、幾卷の書册とはなされつ、其の樣、たとへば、春の野に、菫、蓮花草などいふらん草の、長閑なる日影にあたりて、いとゞ匂ひましたらんやうにて、見る目も、いとあやなり。あはれ、ぬしのこの振舞よ。幼き人の心をよろこばしめて、その益を與ふること、如何ばかりならん。さるにても、このめでたきぬしの志を、苔の下なる古の人に、知らせまほしうてなん。

葉櫻の下蔭　松本道別

花のうはさもやみて、若葉ふく風すゞしきころ、ひと日、ふりはへさそふ人ありて、向嶋をせうえうす、櫻葉そらをおほうて、刺日をかげり、風しづかに、塵たゝず。のどかに心ゆくさまなり。あざれあひ、口吟などして、ゆき〳〵、白髯の森かげにつき、あたりの芝うちはらい、尻すゑて、うなゐに持せたる酒とうでゝくむ。土器あまたゝびめぐるほどに、われも、友も、ゑひしれて、だみ聲あげて、今やうづゝしりうたふ。友の人、氣あがりたるけはひにて、土器をあげていふ、世の俗物、たゞ、花のうるはしきをしりて、葉櫻のゆかしきをしらず。花さきぬといへば、そゝやとて、西に東に、塵くえはらゝかしてあわてくるひ、一たび、色あせ英おちては、また、名殘をたづねて、昔ゆかしき、葉櫻のかげとふもいなし。あはれしらぬ限なる哉。花はさかりに、月はくまなきをのみ見

るものかはとは、双が岡の法師も、いひしならずや。たれこめて春のゆくへもしらざりしわれの、今こゝに。葉櫻のあはれとふこそ、まことの風流ならめ。さならずやと、いとしたりがほにいへバ、われも、さりけらしとこたふ。折しも、後のかたに、物のきしめく音して、あながま〱といふ聲するに、おどろきて、かへりみすれバ、御社のみとびらひらかせて、おし〱の聲おごそかに立ちいづる翁あり。八束髯むなさきにたれて、さながら、白金の針をうゑたるごとし。これなむ、白髯の御神におはすらむ、とおしはかられて、かしこさに、鴨じもの、うなじたれ、そこにうちふせど、翁、やをら、口をひらき、世には、えせひが者ありて、なにごとも、異やうなるをこのみ、人にかはりたるを、えたりと思ふ。かゝるやつこらは、えて、おもはぬ災にあふことあるものなり。支那服きて、打たゝかれ、酢豆腐くひて、やもひえしことなどは、いましたちも、見もし、聞もするところならむ。われ、なほ、いましらがために、よき例引きて、かたりきかさむ。今はむかし、いましらがごとき、えせ風流人なりけり。葉櫻は花よりもをかしとて、來りて、こゝの森かげにくみ、土器のうちに、櫻實のおちしを知らでのみけり。この男、かへりていく日もたゝぬに、頭のたゞなか、すこしいたみて、はれあがりたるところより、木の芽のごときもの、つぬぐみいでぬ。あはやとおどろくまに、この芽、すく〱とおひたちて櫻の木となり、はや、せむ方なければ、人目をはぢて、たれこめてのみあり

けり。次の春、枝しみさし花さきければ、心ぞけの都人ども、きゝつたへて、吉野初瀬はしらず、上野隅田にもまして、見どころありとて、とひくる人、おとをたゝず。ゑひては、物の音ならし、鬼おひなどして、狂ひまはり、さうどきこと限なければ、かくては、頭もやぶれなむとて、うち腹だちて、根こぎに引きぬきて、すてけり。そのあと、水たまりて、堀池となりぬ。やがて、夏のころとなれば、こたびは、人々涼舟をうかべ、妓をのせて、不忍にもなきながめと、夜ごと來りてうたひさわぎ、また、兩國の川びらきを、こゝにうつして、烟火の音、玉やかぎやの聲、ひゞきあひて、天地もくだけんばかりなりけれど、あはれ、とてもかくても苦しきうき世なりけりとて、遂に、堀池に身をなげて死にけり。いましらがためには、よき誡の鑑ぞや。なべて、異やうなることは、好まぬものなり。と、いとねもごろに、さとし給ふ。われ、げにさもこそ侍らめ。されど、吾は、あながち、異やうをこのむにもあらず。むづかしき理窟しるにもあらず。あは、三輪の大神のまうし子にて、たゞ、うま酒をこそ好め。酒のあるところは、など、花、紅葉と、若葉、落葉とをえらむむ。まづ、大神にも一盞をきこしめし給へど、土器たてまつれど、髯の神もはゝゑみて、こゝろよくうけ給ひ、ともにゑひしれて、どよめき、神樂歌うたふ。

いにしへの人もましらといひにしは
うまさけのまぬやつこなりけり

雜報

●女子高等師範學校の見舞　女子高等師範學校教諭武村千佐子ぬし、小川二葉子ぬしたちは、去にし十二日、同校生徒百五十名ばかりを引きつれて、豫備病院を見舞ひ、各病室を廻訪して、患者につき、ねもごろに、戰爭當時のありさまを問ひなどしては、ふかく、これを慰め、ことに、狂言、手品、音曲など、それ〲の人を雇ひ、おの〲わざを演せしめて、大に、負傷患者を慰めたりとぞ。煎餅千八百五十人前と、扇子千八百五十本とを寄贈したりといふ。

●高等女學校の幼兒保育法　東京府高等女學校の規則は、先月二十日を以て改正せしが、其主要は、本科の教育科、及、家事科に、教授時間を增加して、幼兒保育の原理、及、方法を設け、高等女子師範學校近傍の公私立幼稚園に付きて、實地の狀況を參觀せしめ、本科卒業の際には、一般の生徒に、幼稚園保姆たるべき技能を充分に習得せしむるにありて、今回、山梨縣尋常師範學校より轉任したる明石教諭、專ら之を擔任せらるゝ都合といふ。

●看護美談　府下本鄕區看護婦會會長秋間爲子ぬしは、征淸事件に就きては、婦人なりとて、いかで、國恩の萬分一を報いでやはあるべきとて、志同じき婦人九名ばかりを語らひ、更に、その

親戚より、いづれも、たとひ、異域にたふるとも、すこしも異存なしとの證書を得たりしかバ、大によろこび、みづから、渡清して、看護の任にあたらんと、當局の人々にたのみ聞えたりしも、都合ありとて允されず、かへりて、廣島豫備病院將校室附の看護を命ぜられたり。これによりて、廣島におもむき、爾後、日となく、夜となく、心をつくして、ひたすら、看護の事をつとめ勵みけれバ、成蹟、まことに著かりき。こゝに於いて、日本赤十字社にては、ふかく、其の勞をほめたゝへ、手當として、金七十圓を贈られたり。去かるに、ぬし等は、かたく、辭退して受けざりしが、ふたゝび、三たび、勸められて、やうやく受くることゝなりしに、尚、他の同志とはかりて、其の半額金三十五圓をバ、同社に寄附したりとぞ。また、ぬし等は、今も、なほ、彼の地にありて、もはら、看護のことをいそしみ勉め、かりそめにも、倦み勞れたる氣色なしといふ。いかにうるはしき婦人たちならずや。

●伊藤夫人　伊藤海軍大佐夫人マリーネぬしは、この頃、フラネル襟卷四百五十枚を、東京豫備病院患者へ、寄贈せられたりといふ。

●米國女子教育の景況　近年米國にて、女子の高等教育を受くる者の増加する割合は、實に著明のものなり、其の中學に入り、大學に遷る者、甚夥多にして、從ふて、醫師となり、教師となる者、非常の速度を以て増殖す。特に、教師の増加するは、最、灼焉たる事實にして、今を距る、五年前、

即、千八百九十年に日、合衆國全國中、男教師十二萬五千五百十五人に對する女教師全數二十三萬八千三百九十七人の處、後二年男教師三千九百四十七人を減少せしに論なく、女教師は、則、更に、一萬四千三百八十三人を增加せり。斯る景况にて進むときは、教師てふ職業は、遂に、全く、女子に占領せらるゝに至るべき事明けし。現今すら、女子の教師として用ゐらるゝは、小學校に限らず、中學校、師範學校、乃至、大學校皆、亦、然り。之を以て、此を推せば、同國にての女子教育は、今後更に、驚くべき効を見むこと、疑ひなしと、或新聞紙に記載せり。

●英國の女子に關せる米國新聞の批評　米國桑港クロニクル新聞に云はく、英國が、工場條例を規定せる眞意は、婦人、及び、小兒は、己れを保護し、雇主の壓制に抵抗し、身體の健康に注意するの能力なきものなれば、政府、是に干渉し、保護せざる可からずと云ふにありて、勞働時間は、勿論、休息、臨時就業の時間まで、一々精細に、法律を以て規定し、至極行き屆ける樣なれど、又、往往窮屈に失するの嫌なきに非ず、男子に劣らずして、充分獨立の生計を維持する力ある婦人も、右の規則ある爲め、束縛を受け、あらずもがなの感を起すこと屢々なり、是に於て、婦人職業協會は、今、將に、下院の議題に上らんとする工場條例に、修正を加へ、成年の婦人に、一層の自由を與へ、勝手に、其の職業を取らしめんとの建議を爲さんと奔走中なれど、恐らくは、此の建議は、皮相の

考案として擯斥せられ、婦女子は、實際、決して、己、自を、保護すべき、能力なきものなりと、一笑に附して、採用せられざるべきこと必然焉。併、貿易を初め、百事自由を重ずる同國の事としては、少しく矛盾の誹を蒙る虞なきか。

●米國女學士我が海軍勇士の帽章を求む　才藻富贍の學士として朝野に隱れなき一紳士、未だ青年俊髦の米國某大學に苦學せし頃の事なり、同窓の友に、ホプソン女史とて、親しく交はりける婦人ありけり。春のあした、秋の夕、常に道を講じ、筆を闘はし、互ひに無二の學友と思ひ合せけるうち、いつしか其々業を卒へしかバ、紳士は、女史と、惜き袂を別ちて、八重の潮路遙に歸國せし後は、一二回の音信ありしのみ、處かはり境異なるにつけて、忘るゝともなしに忘れはてゝ、五年の月日を夢と過せし今日此頃、ゆくりなくも、米國より、一封の書面届きけり、封押し披きて見れバ、思ひきや、ホプソン女史が、久々の便りならんとは、あまりの事に嬉しさの波胸に漂よはしつゝ、讀みもて行けバ、まづ我國の、今回の義戰を賛賞すると、共に、特に、黃海々戰の偉勳絕大なりしを、筆を極めて祝し來り、最後に、此の役に、奮鬪苦戰せる、幾多兵勇の中につき、誰にてもあれ、其中の一人が、頂きし軍帽の前面帽章、即ち金字にて、帝國艦名を明記しある横線をいたゞきたしとの意味なりき。紳士は、讀み了りて、つくづく感じ、何とかして、女史の心を空うせざらんを希ひつゝ、今、たゞ、之を求むるに餘念なきよし。な

るが、さても、女史が、斯やうに勇士の帽章を望み來りしは、彼の國の例として、一ッは、之を其身の紀念とするため、二ッには、閑遊會、或は、舞踏會の席などに、己が制服の腕に捲きつけて、人々に誇らん心とぞ知られける。

●女子の本分　自書自讃は、わが社の好まざるところなれども、他の批評に至りては、よくもわれ、あしくもあれ、一度は掲げて、その勞を謝せざるべからず。かつて、わが社にて發行したりし女子の本分は、左の批評を試みられたり。こゝに掲げて、あへて、その勞を多謝す。因にいふ。右女子の本分は、久しく、品切となり居れるを、こたび、再版に附する筈なり。

女子の本分　此一卷の新著は、編者が平素第二の母として、其學德を欣迎せる、三輪田眞佐子女史のものせられたる良き書なり。原稿の名は、女子要言と題して、嘗て、女鑑といへる雜誌に、試みに載せられけるを、人々の需めに應じ、そこここ幾多の修删を爲して、一部の新刊書とはせられたり。女史の學殖は深し、精し。されど、明治女流が、机上に呫嗶を積みて學びたるとは、其徑路を異にし、悉く、閲歷、心得の活學なり。何を以てか之を云ふ、曰く、女史四十餘年の長歲月の間には、富みたる時代あり、貧しき時代あり、舅姑に奉じ、良人に仕へたる時代あり、夫は遠逝し、遺孤を長育したる時代あり、他家幼壯の女子を監督したる時代あり、幕府の末造に際し、流離苦艱を嘗めたる時代あり、明治の盛世に際し、本邦古

來の女敎と、歐米新來の女子敎育を、折衷勘閲したる時代あり。女子半生の境遇は、世故と共に千種萬般の變遷を享けたり。女史か特得の見は、蓋、此にあり。其學ぶ所、肆ふ所、世の束髮先生と異なりと云ふも、豈に、過言ならんや。書中章を分つ、凡て、八章、總論、女德、女子特別の身分、女子の藝業、女子の容裝、女子の人に接する道、女子の生活及人物、結論、每章綱目あり、女子終生の要訣、具備せざるはなし。世上女敎閨範の書乏しからず、然れども、其の躬行心得より出てたるもの、誠に稀少なり、巾幗の良典、此書を措て、將、何くに求むべき。(日本弘道會叢記)

女子の本分を讀む　三輪田眞佐子女史之を著はし、國光社より發兌す。二百十八頁の中本にて、章を、總論、女德、女史特別の身分、女子の藝業、女子の容裝、女子の人に接する道、女子の生活及人物、結論の八つに分ちたり。

言を實驗親試のまごゝろより發し、識見確固として、一種の奇氣人を射るの處ろ、本書の長所となす。凡そ、守る所ろ固き、長老自得の婦女子は、其覺悟の雄々しきと、同もに多少の僻見を免かれず、稍もすれバ、迂遠偏狹の弊に陷ゐり易きものなるに、本書の著者は、舊時代に人となりて、當世に齒ひ高からんと思はるゝに、太はだ公平にして、大勢に達したる、秀抜の訓戒を與へらるゝ所多し。曰く、

一國の習慣にして害なきものは、容易に廢すべからず、而して習慣の常理に悖らざるものは、

是れ其國の道なり。一得一失は天地の常數なり、故に西洋女子も我より長ずる所なきにしもあらず、左れど其長ずる所に限り之を採るは進化の道なれど、徒らに其善きものをも誹るべからす。唯、日本女子たる心を基礎として、廣く智識を世界に求めよかし、（二頁十頁）

之れ本書一部の精神なり又主義ならん。此こゝろ全躰に貫徹せるを見る。

且や、本書の著者は、好く自然を樂しむの妙悟を得たり。惟ふに、チーナウアに於ける、幽靜自得の經驗あたゝかき御力ならめ。此氣所々に露はるれども、尤とも麗はしきは、左の一段にあり、

誰か言ふ。石鐵浮び、毛葉沈むと。若能く此理を解するものあらむ、宇内の大則を知るものとこそ云ふべけれ。宜なる哉、古より、衆に秀でて道を知りしものは、悉とく自然の現象を愛せざるものなし。孔子が川上に在りて逝くものはかくの如しと曰ひける、孟子の、水の低きに就くを見て性善を知りたる、及び、耶蘇の、野に咲く百合の花を賞して天工を悟りたりし如き、是なり。故に、吾人若し靈心をして颯々たる夕に千鳥鳴く河畔を行かむ、必らず人情の切なるを覺えん。渺々たる碧海に臨みて默想し、輝輝たる日沒に對して沈思せむ、自から勸善懲惡の訓誨を得るならん。其他、宇内の光景、一として人道の源を吾人に示さゞるものなし。五條三位藤原俊成卿が、

世の中に道こそなけれ思ひ入る

山の奥にも鹿ぞ鳴なる

と詠まれしは、千萬無量の意味あるかな。(三十八頁)、加之、活用飜轉の才筆凡ならず、讀者をして意はず拍手賛歎せしむるもの多し。左の一理解と、其文とを見よ、

或は曰はん、風儀は恰かも四季時候の如く、推移循環止まらざるものなれば、時勢の流行にさへ從はゞ別に良非の撰擇を要せずして可なりと。是れ大に誤まれるなり。夫れ四季の變更あるは天則ある所以にして年々歳々不易の道を進むる也、何ぞ常なきと言ふべけんや。(四頁)

要するに、本書は、近年世に出でし女學書類中の尤とも價値あるものゝ一つなるべし。惜び哉、言大躰に渉りて、細事に入らず、此の經驗深げに見ゆる長老婦人をして、更に仔細に訓ゆる所ろあらしめざることなり。左れど、本書著述の主旨は左の如けん、則はち直ちに此書に就て求むべからず。他日第二の著あらんことを年少女學生の爲に望むと云ふ。

おのれが殆んど五十年來經歷せし實驗を披露し、天下の諸嬢に日本女子の思想を堅固にし、國の基は家にあり、家の本は女子にありと云ふに憚らざる女子となれかしと祈るのみ(八頁)

(女學雜誌)

○名所舊跡ひとり案内　委しく言へば、奠都紀念祭聯合區域に付て、及び紀伊阿波の二國をも附

記したるものにして、記する所頗ぶる細密。蓋しひとり案内の名に背かざるが如し、頁數總計一九四の小冊子にて、代價は貳拾錢、發行者は、京都市猪熊通下魚棚下る樽屋町二十七番戸柴崎德衛氏、當節柄一覽の値わりと云ふべし。

○婦人新報　の第三號は、東京麴町區上二番町三十一番地の同社より發行せられたり。社說には、婚姻に關する今日の傾向と題して、男子に關する時弊を論じたり、全篇を通讀するに非らざれば、其の全璧を見るに至らざるも、有用一讀を價するの文字なり、此他逸話小說雜錄などあり、近時婦人雜誌の世に行はるゝもの、倍す多きを加ふると共に、耶蘇教臭味のもの多きに居るが如きは、吾輩の餘りに感服せざる所なるが、本誌の本色は果して如何、尙は篤と熟讀の上細評を試ることもあらん。

○少年世界　第九號は、例の博文館より發兌せり、夫子自から卷首に叫ぶらく、ヤア今度のには口繪が三枚あらア！と、少年概して繪畫を喜ぶ、少年世界子の自から叫ぶ所は、乃ち少年の喜ぶ所なるべし、之を記して紹介すと云爾。

寄松懷舊

右は曾祖母松尾多勢子一周年祭に付江湖諸君の玉詠佳吟を靈前に供し度願くは來る六月十日迄に御惠贈被下度候也

明治廿八年五月

信濃國下伊那郡神稻村故松尾多勢子曾孫
松尾珍臣

玉詠御屆所
東京神田西小川町二丁目九番地
同　三輪田眞佐子

教の庭

五月二十日兼題　薄暮松風

天

くれぬ間と友もかへりし夕ぐれに
さびしさそふるみねの松かせ
筑前國穂波郡飯塚村　林　久子

地

むらがらすねぐらに歸るゆふ山の
松ふくかせのおとのさびしさ
三河國寶飯郡下地町　永井さい子

人

つれづれを慰めがほにそよぐかな
軒ばにかよふまつのゆふかせ
肥後國菊地郡城北村　佐々有鄕子

おとづれて庭の松が枝ふくかせを
聞くも涼しきなつのゆふぐれ
安井　章子

（天地人のほかは原稿到着順なり）

月かげに松のしらべもすみまさり
あらしふくなり夏のゆふぐれ
住山　幾子

鐘の音もあはれにひゞく夕まぐれ
さびしくかよう峯のまつかせ
磯部つや子

夕ぐれにつきをまつまは山のはの
松吹くかせのおとのみぞきく
羽田三緒子

妻琴にしらべあはせてふきおくる
この夕ぐれのにはのまつかせ
羽田たか子

音たかく峯のまつかせふきおくる
日もいりあひのやま寺のかね
河田いし子

夕暮のこゑもあはれにきこゆなり
なつ野のすゞしまつのした風
平野　君子

さながらに琴のしらべとまがふ哉
くれ行くそらにひゞくまつ風
颯井しげ子

こゝろ細さのかぎりなりける

松かせの音むかりしてすみよしの　うらはさびしきゆふぐれの空　吾妻ちか子

淋しさの友とこそなれゆふざれば　いとゞ音そふのきのまつかせ　伊賀　直子

ふるでらの夕のかねをさそひきて　さびしさそふる峯のまつかせ　杉浦いと子

琴のねにたぐへてきゝしまつ風も　かなしさまさる夕ぐれのそら　青木　春子

ゆふまぐれそよふくのきの松風は　琴のしらべにまがひぬるかな　山路かず子

夕がらすねぐらたづぬる影見へて　さびしさまさるみねの松かせ　廣田とめ子

とふひともなき山里のゆふぐれは　たゝまつかせの音のみぞする　樋口のぶ子

きゝ馴れしまつのあらしも夕日影　くれ行くそらは淋しかりけり　植木　鋼子

とふひともなくてさびしき夕暮に　ふせやの門をさそふまつかせ　加納　嘉子

さくらさくはるにいとひし松風の　たもとすゞしきなつの夕ぐれ　小野田のぶ子

世をはかの深山のいほの夕ぐれは　まつかせならでとふ人もなし　能受　重子

夕日かげくるゝ波間はほのみえて　磯邊のまつにかぜわたるなり　近山　松子

夕まぐれゆきかふ人のわとだえて　ひとりかよふはみねのまつ風　名取　正代

きゝなれしあらしの聲も夕ざれば　松にしぐれてそでぬらすなり　梶井　久子

すみぞめの夕山からすかききえて　のきむ淋しくのこるまつかせ　横山まん子

山の端は遠きかたよりくれそめて　まつのあらしぞ淋しかりける　中山せい子

とはれねはつねなりながら夕暮に　淋しさそふるのきのまつかせ　諸井くら子

入相のかねのねたえてゆふぐれに　松が枝さそふかせぞさびしき　池谷むら子

まつかせのおとすさまじき夕暮ぞ　館脇ます子

日ぐらしの鳴く聲すゞしき松が枝に　花山保江子
ふくゆふ風のおとをそへつゝ

水無月のひるにあつさも忘れけり　花山　操子
ゆふべすゞしき松かせのおと

ゆきくれてやどりもとむる旅人の　久野いさ子
こゝろいそがす峯のまつかせ

きくもなほさびしくおもふ夕暮の　福澤喜代子
かねの音にそふみねの松かせ

ものかげのうすれゆくなる夕暮に　佐藤せき子
さびしや友をまつかせのこゑ

春すぎてみどりいろこき松が枝に　中村なか子
わたるもすゞしゆふぐれの風

さみだれもまだ晴れやらぬ夕暮に　中村つき子
さびしくきこゆ松かせのこゑ

春とともにみどりの色は深けれど　清水きよ子
ゆふべさびしき松かせのこゑ

きゝなれてひさしくなりぬ松風の　松下よし子
おともわびしき夕ぐれのころ

ゆふされバとふ人もなき草の庵に　艸木千重子
誰をまつかせふきわたるらむ

ゆふ日かげたつる山邊の松が枝を　重松多加子
ふきわたる風の音のさびしさ

入相のかねもさびしきゆふぐれに　久松せい子
こゑうちそふるみねの松かせ

夕されバみどりのいろもうす墨に　久門利惠子
みえて淋しきみねのまつかせ

暮れぬとも妻戸なたてそ琴の音に　清水　艮子
しらべあはせてまつ風のふく

高砂のかねの音さゆるゆふぐれに　中野はつ子
尾上のまつのかせさわぐなり

むらとりもねぐら求むる聲たえて　三原　照子
のこるもさびしみねのまつ風

まつかせの音さわがしきゆふ暮は　矢野　高子
たづも寢ぐらや求めかぬらむ

五月廿日兼題　幼稚園を觀る記

佐々有郷子

大御代のみさかりにひらけ行くさまは驚くべくよ

ろこぶべきことになんありけるそも〳〵幼稚園といふものは內日刺都のみにひらけぬるかとおもひしはひが心にて此ごろは天さかるひなの町村にも開設して眞かさりに兒童にまなばしむ學の道の山口かつ〳〵をしへて落ることなく殘ることなく尋常小學校の導をなしぬあなめでたあなゆかしき大御代の大御恩の露の眞白玉を兒童の頭にかゝふらすことゝなりぬるもまた大きみのたまものにこそ

名取　正代

うつそみの世のちかころはいと〳〵ひらけて難波江のあしき事ども皆あらたまり學びのすぢもひらけにひらけてをとこをみなもわかちなくいとけなきより皆人の人たる道を學ぶべきいともかしこくたふとき御代とはなりぬひと日學びのひまを得もとより去たしめる友垣二たり三たりしてそれの幼稚園を見はやと思ひたちていでゆきぬやがていたれる今しも始業のかねと共に數多の幼兒は保姆にしたがひ列も正しく開誘室に入りぬこゝの室には三つ四つをかりなる幼兒の木片をもちて保姆の

教へ導くまゝに家の門の形を積立たり後又おのおの幼兒が隨意に工夫してさま〳〵の形を積み並へて翫ぶ樣いとやさしくあいらし又次なる開誘室にいたり見るにこゝには前よりも稍長けたるとおぼしき兒の豆細工するあり細くけづりたる竹を豆もてつなぎ合せてものゝ形を拵ふるなり保姆のこれを敎ふるに幼兒はいかなるもの出來らんといと樂しみつゝかひ〳〵しく拵上げたるは一の小さき籠の形なりこゝにて保姆は其ものゝ名稱用方などさま〳〵の問答をなせりやがてその業をへて全園の幼兒打つれたちてかなたなる廣庭にいでぬ茲には花壇あり池あり築山あり其他種々の草木も植付ありけり幼兒はおのがむき〳〵あそびたはむれ或は花を翫びあるは蝶を追ひて餘念なく中にも年長けたる兒童はくさ〳〵の草木などあつめ來て保姆に問ひかたらひあるは池に畜ひたる魚鳥を見てさまざまの問をおこすなど實に嬉戲の中に天然の事物のことわりをもさとりつへし西哲の言にも「幼兒には學校を建るより庭園を與へよ」と實にさる事

ならんかの西の國の「フレベル」氏は數多の年月幼兒の遊ひたはむるゝ群の中に入りて共に遊ひつゝ經驗して後幼兒の嗜むまゝに數十種の翫器を拵へ與へられたりと其折の有樣いかになとおもひいでていとゝ心に感するまゝをけふてぬ友にも知らせまほしと拙き筆もてかくはものしつ

梶井　久子

幼稚園は西の國に名たゝるふれべる氏が多くの經驗を積みはじめて成りしものとかまことやいわけなき子を育つるうへにつきてはこよなき方便なりと遠近きそひてこれにならひぬとぞ我國にもいにし明治九年の頃はじめて東の都に立てられしよりこのかたおまさかるひなのきはみまでもこれがまうけをなさゞるはなく今は新こる山がつ汐くむ蜑の子に至るまで此處に入りて足らはぬ事なき保育を受くるぞうれしきやひと日誘ふ人ありてある幼稚園にものせしにあたり清らにして遊ぶ幼兒いとうつくしくもみぢのやうなる手もて木を積み板を排ぶるは玉のうてなをもつくりいづべきはじめにや庭の芝生に小隊を組みて兵をまねぶはやがて千萬のあだをもとりひしぐべきはじめならましあるは樂音につれて唱歌し遊戯しあるは花園に胡蝶を追ひ池のみぎはに鯉をよびあるは土細工豆細工などいひてこゝにつどひかしこにむれていと樂しげに遊ぶあどけなさにおのれもをさな子の昔にかへりたる心地せられてをかしきものからまたかゝるいわけなき子をつゆあやまちあらせじと育て導かるゝ人の心づくしさこそと思ひやられてなん世の諺にも三つ子のならはせは百とせまでとか言ひ傳ふれどかく幼きうちより深き教育のことわりにもとづきておほしたてられたる子はやがて忠勇なる御民となりていよ〳〵御國の光をかゝやかすべしと末たのもしきにつけてもこを思ひ起しゝ人の昔も志のばれかつは至らぬくまなきみよの惠のありがたさをぞそはりてなん

降田　槇子

家庭教育の參考にもとて一日幼稚園にゆきてその有樣をみるにこゝに通へる幼兒は六十人あまりあ

り保姆三人つけりおのが行きしをりは幼兒一同は保姆の前になみ居ていと喜しげに樂しき唱歌をうたひまた殊に軍歌をバ一しほ高う勇ましくうたへるこそいとたのもしけれさてそれより後あるは保姆より幼心ににつがはしき修身の話をきゝあるは木を積み板をならべてくさ〴〵の形をつくり色紙もて鶴舟などの形をとりあるはまた五色の糸まさぐりて花てふなどを縫ひその間にはまたいとおもしろき遊戯をなすなど知らず〳〵のうちに智慧をつけ心をみがくやう仕組まれたゝその幼兒どもの餘念なき樣愛らしともらうたしとも云はんかたなしこはむかし何がしとかや云ふとつ國の人思をこらし心をくだきてつひにこの園を造り出でしなりといふことを學校と云はずして園と云ひ教師といはで保姆と云ふこと理わりとかやげに幼兒は園生の草木の如く保姆は園丁のやうなりその木草雨露の惠にうるほひ照る日の御かげとにはつくりの助とよりやがて生ひ立ちて御國の柱ともなる松とも杉とも檜ともなりあるは霜雪に操をやぶらぬ梅となり風になびくやさしき柳となりめでたき菊となるなどおの〳〵さま〴〵ならんされどもまたそのにはつくりの意によりてはまがりゆがめる木とも生ひや出づらん三つ兒の魂百までとの諺の如くよきもあしきも皆この幼きをりのならはしによるなりけりげにゆるがせにすべからざるはこの幼稚の教育にこそと心に思ひわたりてかくなん

殘の花

寄松懷舊　　山越　金子

常磐なる松見るからにしのぶかな
むかしうゑにし人のこゝろを

小金井の櫻花を見る記　　青木　春子

櫻の名所多かる中に小金井の花こそ花の中の花と言ひ傳ふれど都より遠く隔てゐるに心おくれて一度も訪はざりしに今年は鉄路の便あればものせんと學の友なる松枝千代子の君をそゝのかしつるに君は更なり其の母君も未だものせざれバ行かましはしく思ひたる折なりとていたくよろこび給ひし

に勇みたちて明日(四月十四日)の日曜にとかたくいひちぎり來てふしとにつきぬ夢もかゝりなる春の夜の早く白み渡りては鴉と共に起き出てゝ例の事どもなしをへしに空はあやしく曇りたれど花に心のくるひたる折とて その曇りを花にかこつて八時すぐる頃松枝の母君千代子の君幼きいろとゝ四人打ち連れて家を出てぬ市ヶ谷停車塲にて九時八分飯田町發の汽車の着きたるを見れバ車の中は人の波を打ちてその賑はひ言はん方なしやがて荷車を客車となしたるにやう／＼乘り込みぬ乘客の荷車なるをかこつ聲のかしましかりければ千代子の君

花見んと思ふこゝろのあるならは
　しばしは忍べ荷くるまのうち

と讀み出で給ひたれどおのれも

はな見んとおもふ心のあれはこそ
　忍ばれにけり荷くるまのうち

とものしぬ又花に心のいそがれて

まかなちの車もおそくおもふまで
　花にこゝろのいそがるゝかな

汽車の中野驛にさしかゝる頃雨しげく降り出でたり人々今更の如く驚くにつけてかくなん

花見んといでにし人のあめにあひて
　おもひは同じ荷くるまのうち

千代子の君

小金井のはなを見んとてゆく人の
　こゝろはそゞくも春さめのふる

千代子の君の母君も

花みんといて來しものを道すがら
　おやにくにふる春のあめかな

とのたまひしまことにさる事なりとかくして汽車は境停車塲に着きぬ茲に下車して前なる茶屋に入りて用意のわりこをひらきて思ふまゝに腹を滿しぬ雨に思はぬ客を迎へて喜びのあまりにや下女のへんじもいとかろかりければ

はい／＼とへんじもかろし花の茶屋

と口すさみしに人々皆ゑみをもらしぬ傍にさける花の雨に散るをゝしみ給ひて母君

降る雨にさそはれてちる花よりも
　なほつらからん人のこゝろは
花のちるにつけて小金井の花を思ひやり
　小金井のはないかならんふる雨に
　　たひやの花のちるにつけても
千代子の君も今し心にや
　空しくも旅屋にときをうつしなば
　　あめに行手のはなやちるらん
折りしも國分寺より都へかへる滊車の來りぬれど
人々のあわて乘るさまを見て
　花見んとひくる人もふるあめに
　　こゝろ流してかへるあはれさ
此儘かへるも本意なきわざなれど
　花のためはるぐ\尋ね來しものを
　　こしかひもなく歸るべきかは
と口すさみたるに千代子の君
　はなのため思ひたちにし旅なれど
　　ふる春さめもなにかいとはん
その心のいとおもしろけれバその心をかりて
　花のためうかれ來にけりふる雨の
　　やむまでまたん旅のやどりに
二時頃に至り雨やみて緑の山も見えそめたれど待
にしかひもありぬとて再び花の道につき小金井の
下流ある櫻橋に出でしにをりしも花片の流るゝを
見て
　流れ來るさくらをみれは小金井の
　　さとの間近くなりしをぞ知る
と心の内に思ひしに千代子の君
　小金井の花やまちかくなりぬらん
　　ふきくる風にはなの香ぞする
かく心の打ち合ひしもおのづからのわざになんか
くて四五町にして小金井につきぬそも小金井の櫻
はその昔二代將軍秀忠公の御代吉野山なる吉野櫻
を取り寄せて植付け給ひしとかやされどみな幾百
年世を經たる老樹なれど對岸なる枝と枝とを交へ
たるさま言はんかたなしげに聞しに勝る眺めにて
水清く兩岸の間に木瓜の咲き出てたるもとより上
野墨田の比にあらず殊に今日は雨の爲めに首を垂

れ體をかゝめてそのすがたの優しげなるさながら
その美をさけてはこらざるいろみせていとゆかし

白つゆの玉をかざせるさくらばな
　　みるも優しきすがたなりけり

と思はず口すさみたるに千代子の君

なごりなくはるの雨そら雲はれて
　　匂ふもゆかしはなのしたつゆ

千代子の君の母君

小金井の花にそゝきしあめはれぬ
　　こぼれしつゆの玉やひろはん

吉野櫻にて吉野山の櫻を思ひやりて

小金井の花は皆づら咲き滿ちぬ
　　よしのゝ山もさかりなるらん

なほ流にそひてのぼりゆくに一もときはやかに咲き亂れたるを見給ひて千代子の君の母君

ふるうたに言ひしやまとの心なる

とよみ出て給ひければ千代子の君母上その下句はゆづり給ひねとて

朝日ににほふはなはこのはな

とつゝけ給ひぬおな千代子の君の才智に富み給へる事よ昔の清紫にもをさ／＼おとり給ふまじなとかたりつゝ行くに花にうかれて異なる粧ひしたるに遇しもくた／＼しけれどえいはず三時半頃小金井橋につき玆にしばしいこひたるに松の一もと青々と茂れるを見て

白雲とまがふ花間にあを／＼と
　　ときはの松のほこりかほなる

千代子の君の母君

枝がはす花のにほひにときはなる
　　まつも床しくかをりぬるかな

風に花の散りて松にかゝるを見て千代子の君

はる風のはなのこずゑをふく度に
　　常盤のまつにかゝるしらゆき

運動會にやあらん學生の襲を着笠をいたゞけるを見てふと古の兒島高德を思ひ出てゝ

櫻木にかきのこしたるからうたは
　　すゑの世までも薫りけるかな

かくてこゝを立ち出てなほ行きて喜平橋といふに

いたりて花にをしき袖を分ち左に折れて國分寺停車場にゆき午后六時發の滊車にて七時頃市ヶ谷停車場につき例の道を夕風に送られて家につきぬ今日はその花見はまたとはあるまじく思ひたれば直にふづくゑに向ひてかくなん

よしの山の花を見て　　佳山　永年

しき島のやまとの國は　とつ國にすくれし御國
三芳野の芳野のやまは　たぐひなき山峯見れは
八重かさなれる白雲と　花はさきけり谷見れは
八重降りしげる白雪と　はなはにほへり外國の
人もこふらんとつ國の　ひともめつらん敷島の
やまとの國のみ芳野の　芳野のやまの山櫻たな

反　歌

かたりつきいひつきあひてよし野のやま
　とつ國人もたつねきぬらん

學園

六月兼題
- 五日
  - 歌……聞水鷄
  - 文……春日局
- 廿日
  - 歌……夏夜
  - 文……暑中見舞の文

は夫を忘るゝことなく、恰も一室にある如く、相愛の情は、變るべからざるものなり。貞女二夫に見えずと云へば、夫も亦其の心して、己の妻を見捨てゝ、他に心を寄する樣なる事はあるべからず、然るに、世には、始の間は、水も漏らぬ樣に親密にして、父母も心を安め、世の聞もよろしかりし夫婦が、忽にして、相惡み相怒り、遂には別れ／＼となるものあり、是果して如何なる故より源因し來れるか。他なし。夫婦各心を他に寄するか、又は夫にして心を他に奪はるゝか。又は婦にして貞操の實を守らざるかにあり。夫婦は一体なるべきものなれば、決してかゝる事はあるまじきなり。若かゝる事あらむには、人倫を破りたる人と云ふべきなり。

安部郎女

我がせこは物な思ひそ事しあらば火にも水にも我なけなくに

我がせことは、我が夫と云ふことなり。○物な思ひそとは、物思をし給ふことなかれにて、即心配し給ふなと云ふことなり。○なけなくにとは、なからぬにゝて、即我があると云ふ意なり。○一首の意は、我が大切なる夫は、何か鬱々として、

物思はしげに見ゆるが、左樣に心配をし給ふこと勿れ。假令如何なる難儀ありても、妻の我がある以上は、火の中水の中にても、夫の爲には厭はず、骨身を粉に碎きても、助けまゐらすべければ、決して左樣にくよ〳〵、心配し給ふには及ばずとなり。

人には、節義と云ふこと尤大切なり。節義とは、竹に節のあるが如く、人にも亦節ありて、爲すべき時と、爲すべからざる時とあり。其の爲すべき時には、身命を拋ちても、之を斷行し、爲すべからざる時には、決して之を行はざるを云ふ。臣の君の爲に死し、妻の夫の爲に身を捨つる如き是なり。君は臣の天なり。夫は妻の天なり。其の天とする所に仕へて、其の節義を盡くすは、即當然の道なり。故に君の臣を愛撫し給ふごとく、夫も亦妻を大切にせざるべからず。すべて、妻は内を掌りて、外事には關係なきが如しと雖も、若し夫の一大事にして、妻の身にても、之を助ける道ある時は、進みて水火の中をも避けず、之を爲すべきなり。日本武尊の海中に漂蕩し給へるを憂へて、弟橘姫命海に投じて之を救ひ給へり。細川忠興の夫人は、夫の忠義を全くせしめむが爲に、自刃して其の節を顯はせり。

此の如きは、人事の變にして、常にはあらざる事なれども、其の平生の心ざし、確乎として動かざる處なければ、其の變に處して、倉皇狼狽し、遂に其の爲す所を誤り、夫を救ふことを能はざるのみならず、世の物笑ともなりぬべし。人の妻たるものは、兼ねて此處に心を注ぐべきなり。

讀人知らず

敷嶋の大和の國に人ふたり有りとし思はゞ何かなげかむ

敷嶋は、大和の枕詞なり。○人ふたりとは、夫とすべき人二人と云ふことなり。○一首の意は、此の大日本國中に、我が夫とすべき人、二人もありと思はゞ、假令夫に捨てらるゝも、又は別るゝも、何ぞ歎き悲しむことのあるべき。然れども、我が夫とし、天とすべき人は、唯一人にて、他にはなし。故に其の夫の爲に捨てられ、又は別るゝことゝなりては、天として事へ、夫として賴む人なきに至れるた此の如く歎き悲しむとなり。

凡、人の身に尊き所のものは、天なり。妻の身に取りて尊き處の者は、夫なり。故に夫は天なり。人の天を二つにせざるが如く、妻の夫を二つにせざるは、又

當然の道なり。忠臣二君に事へず、貞女二夫に見えずとは、此の常經よりあらはれし道なれど、天地の公道と云ふべし。若人は悉く夫なりと云ひて、其の見ゆる所を異にせど、是即禽獸なり。人の禽獸と異なる所以は、天地の常經を行ひ、公道をふめどなり。然れども、人事の變に遭遇し、止を得ずして此の常經を守ること能はざるものなきにしも非れども、人の妻たるもの、皆此の心ざしならむには、如何なる世の變遷にあふとも、此の公道を踏むこと能はざる事あらむや。蓋世の有様を見るに、夫に飽かれ、或は捨てらるゝ妻は、大方此の心懸なきものゝ如し。故に一朝離別の不幸にあひても、恬として恥ぢず、返りて前の夫を誹謗するに至るもの多し。且今日の世の澆薄なること、亦云ふに忍びざるものあり。豈浩嘆の至ならずや。婦人女子たるもの、此の歌をよく讀み、よく味はゞ、思半に過ぐるものあらむ。

讀人知らず

ありそこえ岩うつ波の外心我は思はじ命しぬとも

ありそとは、荒磯なり。○一首の意は、我が誠心は、夫一人の外に向ふ所なし。

恰も彼の荒き磯を越えて、岩に當り碎くる波の、外の處へ行く如くに、夫をおきて外に思ふ心などは、我は決して持たず。假令、其が爲に我が命は盡きはてゝ、死ぬる場合に至るとも、夫より外に思ふ人はなしとなり。

凡、人は、其の誠心を一途に定むるを第一とす。臣は君に對して、忠を盡さむことに定め、子は親に對して、孝を盡さむことに定め、弟は兄に妹は姉に、友ならむことを專一とし、婦は夫に事ふることを第一とすべし。すべて、其の心の向ふ所一ならざる時は、其の爲す所も亦定らざるものなれば、忠孝友和の德も備らざるに至るなり。此の歌は、妻たるものゝ、夫に對して、心の持ち樣は此くあるべきものぞとの教なれども、此の意は、啻に妻たるものゝみにあらず、人たるものゝ、正に守るべき所の道なり。貞女二夫に見えざる教もあれど、妻たるものゝ、此の如くならざるべからざることは云ふまでもなきことなり。然して妻の夫を思ふに、二心なきのみにては、亦其の完全なる貞婦とは云ふべからず。如何に二心なく思ふとも、夫を侮り蔑にせば、婦道を失ふに至りぬべし。故に夫を愛し思ふと共に、敬の字を忘るべからず。常に夫を敬ひ尊び、少しにても疎畧にすることなく、恰

も、賓客に接するが如く、萬事取り持ちなば、夫も亦一しほ其の愛情を濃にするに至るものなり。世には、夫をよく愛しよく思ひ、聊も二心なきものは多けれども、之を尊敬して、よく事ふるものは稀なり、世の妻たるものは、必夫は君の如く天の如く思ひて、決して疎にすべからず。

讀人しらず

君をおきてあだし心を我が持たば末の松山波もこえなむ

あだし心とは、あだくしき心にて、他心と云ふ意なり。○末の松山は、奥州にある高き山にて、海邊にはあれども、決して波の越ゆることはなき山なり。○一首の意は、我は君を天とし夫として頼み事ふることなれば、決して君より外に思ふ人はなし。若しも、君をさしおきて、他心を持つ様なることがあるならむ。彼の奥州にある末の松山と云ふ高き山も、波が越ゆることならむ。若し其の山を波が越ゆることなき以上は、決して我は他心を持つことなしとの意なり。

天地は、處を變ずることなし。晝夜は時を更ふることなし。天地にして上下を異にすることあらむか。是天地の大變なり。晝夜にして時を違ふることあらむか。

是季候の大變なり。天地季候の大變は、實に世の非常なる時なり。其の非常なる時に處して、心を改めざるは、人生の尤も尊き處なるべし。如何なる變にあひても、臣は君を忘れず、子は親を思ひ、兄弟夫婦、互に相反することなくば、人倫の道は、決して欠くまじきなり。世の妻たるもの、如何に悲境に陥るも、如何に憂苦に沈淪するも、夫を思ひ敬ふ心だに變ずる事なからむには、實に貞節なる世の鑑ともなりぬべし。

前大納言光頼

古もたぐひもあらじ我か宿よ枝をつらぬる柏木のかげ

枝をつらぬるとは、所謂連理のことにて、枝と枝とが連りて居ることなり。兄弟によそへて云へり。○一首の意は、兄弟相睦じくして、共に高位高官に登り、此の如く榮え行くものは、古の御代にも、比類はあるまじ。恰も枝を連ねたる柏木のかげの如く、我等兄弟ともに、互に相扶け相導きて、盛榮なる運にあひて樂しき事よと云へるなり。

兄弟姉妹は、共に親の遺體を受けて、終身の相談相手、即杖柱とも頼みたのまる

るものなれど、其の間の親密は云ふも更なり。兄姉と弟妹を教へ導き、弟妹は兄姉に能く従ひて、互に相扶け相導きあひて、苦楽を共にせざるべからず。而して、兄姉は、弟妹よりも先に生れて、経験も多きものなれど、弟妹は、常に之を尊敬して、侮り蔑にする様の事なく、何事も相談して行ふべし。又弟妹は、兄姉よりも後に生れて、未見聞も廣からざれど、何事も能く丁寧に親切に教へ導くべし。若咎過などのありたる時は、顔色を和げ、詞を慎みて、互に諫めあふべきなり。諫を受けたる時は、悦びて之を守り、弟妹の云ふことゝて侮るべからず。又己は暇ありて、兄弟姉妹の忙しきを見ば、直に行きて之を助け、其の勞を分つ様にすべし。然する時は、互に恨むこともなく、怒る事もなく、常に心楽しくして、世の聞もめでたく、父母には孝行となり、一家は榮ゆべし。恰も是柏木の枝を連ねたるかげの如くになるなり。世には、兄弟姉妹、中あしくして、朝夕爭論の絶えるざ人もあれど、一朝遠く隔りて、艱難辛苦にあひ、頼少なくなる時は、父母の事は更なり。直に兄弟姉妹の事を思ひ出だし、うたゝ戀しくなるものなり。是兄弟姉妹の間柄は、切りても切られぬものなれどなり。世のまゝしき兄弟姉妹は、

よく考へ謹むべし。

太宰大貳重家

武藏野の若紫のころもではゆかりまでこそ嬉しかりけれ

若紫とは、紫の色の若々しくして、美麗なるを云ふ。○ころもでとは、袖の事にて、此處にては衣服の事に見てもよろし。○ゆかりとは、緣と云ふことなり。此の歌は、古歌に「紫の一本ゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞ見る」とあるより、よみ出でたるものなり。偖此の歌の意は、紫の色に咲きたる菫の花の餘りに美しき故に、其の緣のある武藏野の草は、皆ながら勝れてよく見ゆるとなり。一首の意は、武藏野に咲きにほへる菫の花の如く、美しき若紫の色に染めたる衣服を着て居ると、其の衣手のよきのみならず、其の緣のものまでも、勝れてよく見えて、心も樂しく嬉しきものぞとなり。即兄弟姉妹の中にて、一人の勝れてよき人あれば、其の人の兄弟姉妹より、父母親戚の緣の人に至るまで、勝れてよき人と見えて、嬉しく樂しと云ふ意を含めたる歌なり。

玉はすべて尊きものにもあらざれども、夜光連城の如きものあれば、人は珍重せ

らるゝなり。金はすべて善きものゝもあらざれども、黄金の如きものあれば、人之を秘藏するなり。人も亦此の如し。一人勝れたる人あれば、其の人の尊敬さるるは、云ふも更なり。其の緣の人までも、人に輕蔑はされぬなり。故に兄弟姉妹の中にても、一人勝れてよき人あれば、其の人の兄弟姉妹までも、人に尊敬せられ、世に愛慕せらる。況んや兄弟姉妹皆よき人に於いてをや。又淸水の中に、墨汁一滴を投ずれば、忽黑水となり、朱汁一滴を投ずれば直に赤水に變ず。兄弟姉妹も之に同じく、一人よき人あれば、其の他もおのづから善となり。一人惡しき人あれば、皆之に習ひて惡となるは、理の免れざる處なるべし。假令皆化せられざるにもせよ。一人の善なるは、皆善に見え、一人の惡なるは、皆惡に見ゆるなり。今日朋友と交際する間にも、彼の人は彼の人の子なればとか、或は兄弟姉妹なればとか云ひて、善なるには、善なりと思ひ、惡なるには、惡なりと思ひ、未其の當人の善惡をも知らずして、直に心の中に善惡を決定するなり。是其のゆかりまで嬉しく思ひ、悲しく思ふ以所なり。故に兄弟姉妹は、尤も其の心して、善事を行ふべきなり。

三輪田眞佐子著

女子の本分

再版　全壹册

今般再版出來致候間續々御注文に應し申べく候
定價金貳拾五錢也地方は郵送稅金四錢也（切手代用は一割增の事）
但國光又は女鑑購讀者各位には定價金の二割引（即金貳拾錢也）を
以て發賣可仕候

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

注意

今後本社に宛てらるゝ御書面は御用向の模樣により夫々左の各部に御宛て下され度候若さ候はずば混雜する恐ある哉も計り難く候

國光社編輯部 編輯一切に關する事柄

國光社會計部 金錢受渡に關する事柄

國光社圖書部 圖書雜誌に關する事柄

國光社印刷部 活版印刷に關する事柄

尚今後社用に關する事柄に付直接に發行人編輯人印刷人等に御申越被下候事御斷申上候

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治二十八年五月十九日印刷
同　年五月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社